

VII まとめ

1. 縄文時代

1) 縄文土器

大野田遺跡では後期前葉の遺物が主体的に検出された。宮城県では後期初頭から前葉の土器型式を南境式と呼称している。仙台湾でも名取川下流域に位置する大野田遺跡付近では後期南境式の良好な資料が多数検出されている。六反田遺跡〔仙台市教育委員会 1987〕(以下、六反田遺跡〔1987〕と略す)では大木 10 式に後続する、方形区画文系土器に代表される後期初頭の第 I 群土器から、後期前葉の蕨手文や磨り消し縄文に移行する第 II 群土器への変遷が示され、下ノ内浦遺跡〔仙台市教育委員会 1996〕(以下、下ノ内浦遺跡〔1996〕と略す)では六反田第 II 群土器に後続する、沈線文が多条化する土器群が認められ、これらの中には新潟県を中心とする、南三十稻場系土器と同系統の土器が一定量認められる。同遺跡では細沈線化した多条沈線文が認められる土器群へと変遷し、十腰内 1b 式または大湯式とされる東北北(中)部系や堀之内 2 式系土器も少量現われる。山口遺跡〔仙台市教育委員会 1981〕(以下、山口遺跡〔1981〕と略す)では東北北部系や堀之内 2 式系などの異形統土器の出土量が多くなり、伊古田遺跡〔仙台市教育委員会 1995〕(以下、伊古田遺跡〔1995〕と略す)に代表される後期中葉宝ヶ峯式土器の成立の要因とされ、王ノ塙遺跡〔仙台市教育委員会 2000〕(以下、王ノ塙遺跡〔2000〕と略す)で定形化された宝ヶ峯式が出土する。大野田遺跡では東北北部系の土器や堀之内 2 式系後半期の土器が特定の器種に多く認められる。

大野田遺跡で検出された東北北(中)部系の土器は文様構成がかなり変容しているものが多く在地で製作されたものと思われ、北部系の要素を備えた南境式土器と考えられる。堀之内 2 式系の土器は器形・文様構成などはほぼ同様なものが多いが胎土は在地のものとあまり変わらず搬入品の可能性は低いものと思われる。

ここで後期初頭から中葉の初期段階までの異系統土器群についてみておきたい。後期初頭の主に前半段階(以下、南境 I -1 期と呼称)では中期末葉大木 10 式系から漸移変化した方形区画文系土器が主体を占める。また岩手県南部を中心とする門前式と同系統の土器が認められるが、広義の門前式は方形区画文系土器などを包括し、狭義の門前式が主体とならない地域もあり、狭義の門前式は後期前葉へ統く一類型と考えられる。岩手県南部から仙台湾にかけての地域は大木 10 式系から漸移変化した土器が主体となる地域と考えられる。

後期初頭の後半段階(以下、南境 I -2 期と呼称)では福島県を中心とする綱取 I 式後半段階から綱取 II 式初期段階の土器、新潟県を中心とする三十稻場式土器が散見され新潟県を含む東北地方南部との融合が開始され始める。六反田遺跡〔1987〕の三十稻場式土器(前提報告書 第 140 図 2)は器形・文様構成から搬入品の可能性があり、新潟県では新段階に比定されているものである。この時期は後期前葉への移行期と捉えられる。

後期前葉の前半段階(以下南境 II -1 期と呼称)では方形区画文系土器は衰退はじめ、綱取 II 式系の蕨手文や磨り消し縄文が見られるようになり、この段階では仙台湾を含む県南部を中心に綱取 II 式土器圏に入る。多条(太)沈線文段階(以下南境 II -2 期と呼称)では前半段階では綱取 II 式土器を中心に推移し、主に後半段階で新潟県域を中心とする南三十稻場系土器との交流によって、多条沈線の細沈線化が始まるものと思われる。また内面に格子目状沈線文を施す深鉢がこの時期に出現するものと思われる。

後期前葉の後半段階(以下、南境 II -3 期と呼称)では細沈線化した多条沈線文や櫛齒状工具を使用する細沈線文(以下、櫛齒状沈線文と略)が主体となりはじめ、綱取 II 式系の土器も残る。後期前葉の終末段階(以下、南境 II -4 期と呼称)では細密化した多条細沈線土器が主体となり、後半段階を中心に東北地方北部系の土器が流入はじめめる。これらの系統の土器は岩手県や秋田県南部地域では前段階の土器(十腰内 1a 併行期)はほとんど検出されないが、南境 II -4 期後半頃になると仙台湾まで南下する。器種では深鉢形土器や壺形土器・脚部に透穴を有する台付鉢形土器が中心となる。またほぼ同時期に堀之内 II 式系の主に後半期の土器が東北地方の宮城・山形県域まで浅鉢形土器や朝顔形の深鉢形土器を中心に認められる。

後期中葉の初頭段階では加曾利 B1 式系の浅鉢形土器が出土している。伊古田遺跡〔1995〕では本遺跡を介して北部系の土器が形式変遷していく様子が見てとれ、加曾利 B1 式系の土器も認められる。また、この段階で内面に格子目状沈線文を施す深鉢とともに、櫛齒状沈線文土器や多条沈線文土器がほとんど見られなくなる。また仙台湾で多く

1. 繩文時代

存在していた燃糸文が地文としてほとんど見られなくなる。後期前葉に關東・東北地方で卓越した土器底部の敷物圧痕は引き続き存在する。土器への施文は地文を含めて横位施文が中心となる。

以上のことから、今回の調査で出土した土器は大きく次の3群に分類される。

大野田遺跡出土土器

第Ⅰ群土器 中期中葉～末葉土器

大木式土器は遺構も検出されず破片資料で流れ込みと考えられる。

1 類土器 中葉大木 8b 式土器

渦巻状の隆線文が見られる。8b式でも新段階と思われ、9式に下るかも知れない。

2 類土器 後葉大木 9式土器

3 類土器 末葉大木 10式土器

第Ⅱ群土器 後期前葉土器

1 類土器 南境II-1期土器（綱取II式前葉・宮戸1b式系前葉併行土器）

2 類土器 南境II-2期前半土器（綱取II式中葉併行土器）

3 類土器 東北北部系統の土器（主に南境II-4期併行土器）

a 横位を中心展開する沈線文が主体の土器

b 頸部などに原体側面圧痕文を施す土器、縄文施文の土器

c 頸部などに絡状体側面圧痕文を施す土器、燃糸文施文の土器

4 類土器 堀之内2式系の土器（主に南境II-4期併行土器）

5 類土器 東北南部系の土器（主に南境II-2期後半～II-4期土器）

a 南三十稻場系土器・綱取II式系土器・多条細沈線文土器

b 柳葉状沈線文土器

c 内面に格子目状沈線などを施す深鉢形土器

d 無文の中・小形土器

e 主に横位平行沈線を主体とする土器

f 縄文や燃糸文など圧痕文を施さない地文のみの土器

g 特殊土器

h 突起類・蓋形土器・注口部

第Ⅲ群土器 晩期中葉土器

晩期中葉の大洞C₂式土器。同一土坑内出土。雲形文の浅鉢形土器と同一器形と思われる底部片。C₂式でも古段階と思われる。

大野田遺跡では中期と晩期の土器が見られるが主体は南境II-3期からII-4期で、南境II-1期・II-2期や後期中葉の初頭段階と思われる土器も一定量存在する。

以下、特徴的なものについて記す。

【東北北部系の土器】(第366～369図)

深鉢の器形は頸部で内湾しながら立ち上がり口縁部は外反するものが多い。横位に展開する沈線文が主体となる。東北北部では地文に単節縄文を施文するものが多いが、本遺跡では深鉢形土器と共に主体となる蓋形土器や口付鉢形土器を含め、地文に燃糸文を施文するものが一定量含まれる。また粗製土器の頸部付近に施文されることの多い原体側面圧痕文も見られる。時期は北部系でも最も新しい段階に近似しており、南境II-4期後半を中心とするものと思われる。燃糸文のものには絡状体圧痕文が認められるものがあり、器形は東北北部系に近い。伊古田遺跡〔1995〕では口縁部の外反が強くなる深鉢形土器や蓋形土器に原体側面圧痕文が多用される。口縁部の外反が強くなる深鉢は〔第241図2〕など本遺跡でも少量見られる。402埋設土器に使用された大形の蓋形土器〔第51図1〕は器形も広口蓋形に変化し、内面口縁部に沈線が見られるが文様構成は北部系に近似する。

【堀之内2式系の土器】(第369～370図)

主に顔形のやや小形の深鉢や中・大形の浅鉢が見られ、突起が付くものもある。大形の浅鉢の内面には文様が発達し、焼され黒色化したもの（第257図1）等も存在する。内面口縁部に沈線文が見られるものが多い。器形としては鉢形でも器種の系統性から浅鉢としたものもある。主に堀之内2式後半段階のものが主体と思われるが、口縁部が内傾する浅鉢（第155図1）があり、後期中葉に含まれるもの可能性がある。北部系の土器に対して堀之内2式系の土器は比較的直接的に入ってきたように思われる。

【南三十稻場系の土器】(第371図)

深鉢が主体で頸部から胴部にかけて括れる器形が多い。下ノ内浦遺跡〔1996〕では網取II式系土器の影響を感じさせる南三十稻場古段階と思われる南境II-2期後半からII-3期前半頃の土器が一定量出土し、新潟県南部を含む東北地方南部との交流が窺える。主に南境II-3期後半からII-4期前半には新潟県を含む東北地方南部の土器と融合し多条細沈線文化する。満巻文・刺突文・矢羽根状文・多条（細）沈線文などからなる土器群は南境II-4期を中心とするものと思われる。

【内面に格子目状の沈線文を施す深鉢形土器】(第372・373図)

内面に格子目状沈線文を施すものが主体であるが、格子目にならない櫛齒状沈線文のものや内面に縄文を持つものもある。器形は口縁部が継ぐ開くものが多く、ほとんどが器高25cm前後の中形で、器厚が10mm以上で、重量感があるものが多い。内面の格子目は企画性があまりなく、やや密に施文するものや間隔をあけるものがある。底部には施文されない。外表面は通有の深鉢と変化はないが櫛齒状沈線文や格子目状沈線文を施すものもある。内面には明確な二次被熱痕や磨り跡などは認められない。分布は仙台湾に中心があるものと思われ、下ノ内浦遺跡〔1996〕、山口遺跡〔1981〕、本遺跡の出土量が多い。他に宮城県内や山形県内で散見されるようである。時期は南境II-2～4期を中心になると思われる。伊古田遺跡〔1995〕では出土していない。

【櫛齒状沈線文土器】(第371・372図)

櫛齒状沈線文土器は仙台湾を中心に土器群と思われる、3条から5条を1単位とするS字状の縦位施文の土器群（第192図6）等が南境II-2期後半頃に出現すると思われる。多条沈線文土器と似た変遷をたどり、南境II-3・4期を中心に地文を持つ土器群も現れ（第193図1）等、南境II-4期後半では多条（細）沈線文土器と一体化するもの（第251図1）等が現れる。その後櫛齒状沈線文土器は後期中葉以降粗製土器として一定量存在する。

【特殊土器】(第377図)

特殊土器としたものの中に内面底部に棒状の突起を持つもの（第31図1）等や、体部と突起に接して棒状のものを懸架するもの（第262図1）、内面体部に突起（把手）が付くもの（第162図2）等がある。底部に棒状の突起を有するものは内面に二次被熱痕が顕著なものがあり、特殊な用途が考えられる。器形的には片口鉢形のものが多い。4か所の貫通孔のあるもの（第205図7）も土器内部に付く突起と思われる。他に三足状の脚を持つもの（第205図8）もあり、尖底状の底部のもの（第262図5）はやはり三足状の脚付き土器になる可能性がある。体部中央がドーナツ状となるもの（第162図3）は多人数に液体を注ぐことに特化した器形と思われる。また小形の浅鉢の中には口縁部に貫通孔を有するものや焼成後の穿孔を持つものがあり、いわゆる注口付き浅鉢の形骸化したもので、中形の堀之内2式系の浅鉢（第151図4）にも存在する。

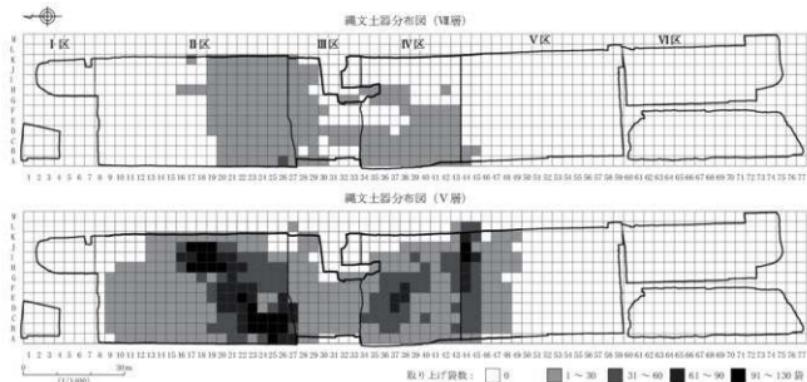
大野田遺跡の土器を俯瞰すると、土器作り集団の移動を前提とするよりも在地集団が器種を選別しながら異系統の土器を積極的に選択して取り入れた可能性が強いように思われる。堀之内2式系の土器は出土量も含め特に目立つ。北部系の土器には地文に撚糸文も採用されている。異系統土器の胎土にも在地土器との差はあまり感じられない。後期前葉には北海道南部から東日本全体に広域なネットワークがある程度出来上がっているものと考えられる。本遺跡に限らず東北地方の南部が中心となっている可能性が強い。これらが後期中葉の土器形式の成立に大きな影響を与える、細部では異なるが手桶・宝ヶ峯・加曾利B式の広域土器圏が出現する大きな要因になると思われる。

本遺跡の主体となる時期は南境II-3・4期となる。本遺跡のV層とVI層は間層も含め比較的短時間で形成されたものと思われ、層位での時期区分はできなかった。従来多条沈線文は堀之内1式新段階併行の網取II式新段階と捉えられてきたが、南三十稻場系土器との交渉を含めてより縦位細沈線化し南境II-4期前半に至るものと思われる。南

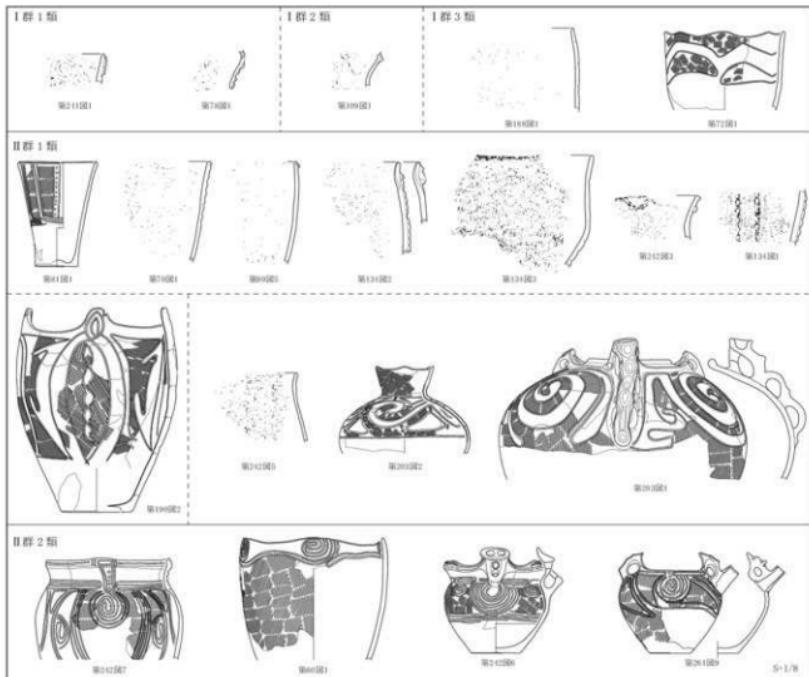
1. 繩文時代

境II-4期後半にはこれまでの縦位施文主体のものから、東北北部系や関東系の土器を介して横位施文化が進み、後期中葉初頭にかけて融合個体（145図4）等も出現し伊古田遺跡〔1995〕に見られる土器群へと変遷する。

繩文時代中期大木式の中核部であった仙台溝は南境I期を中心に大木10式系の土器群が残る。南境II-1期以降東北地方南部を中心とする大木式土器周縁地帯から変化した土器の流入が多くなり始め、南境II-2期後半以降新潟県を含む東北地方南部地域との交流が進み、南境II-4期後半を中心に大木土器様式外縁部の影響を強く受け大きく変化し後期中葉土器様式が成立する。東北北部系の土器は変容・在地化を経ながらその後も一部南下し福島県の後期前葉終末期から中葉初頭土器に影響を与え、加曾利B1式と接点を持つ。加曾利B1式系の土器は主に浅鉢形土器が東北地方南部を中心に分布する。

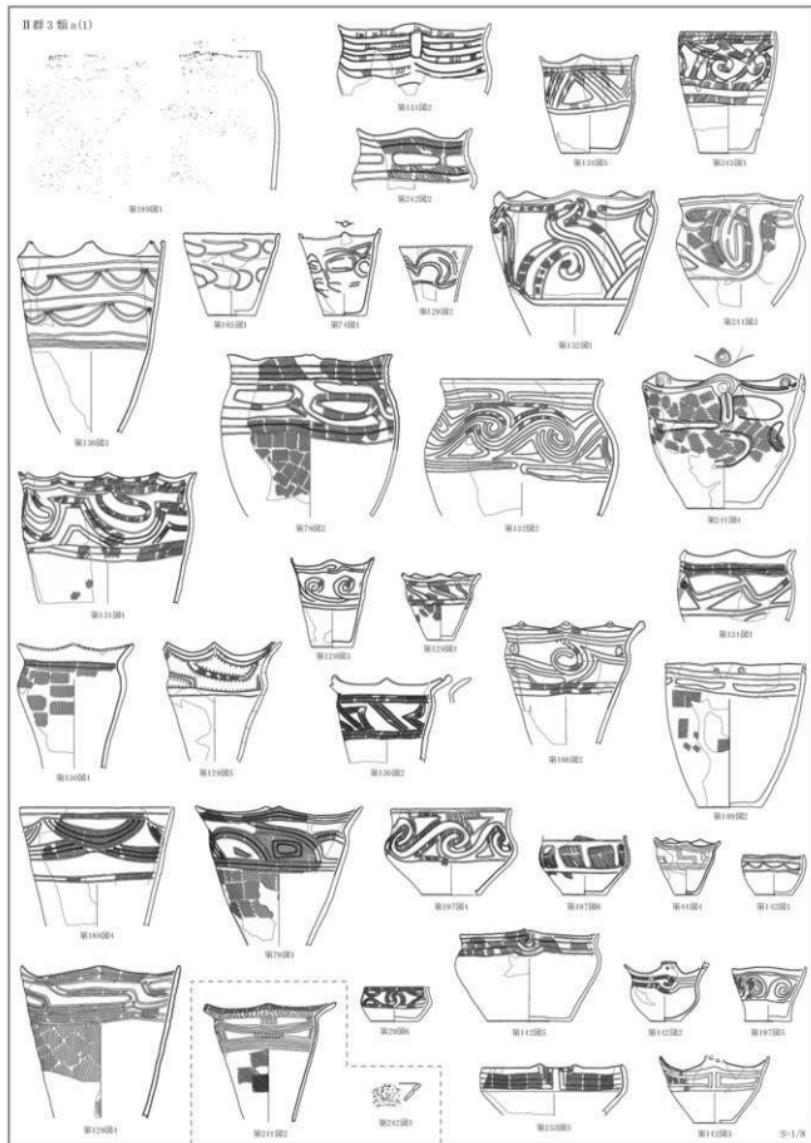


第364図 縄文土器分布図

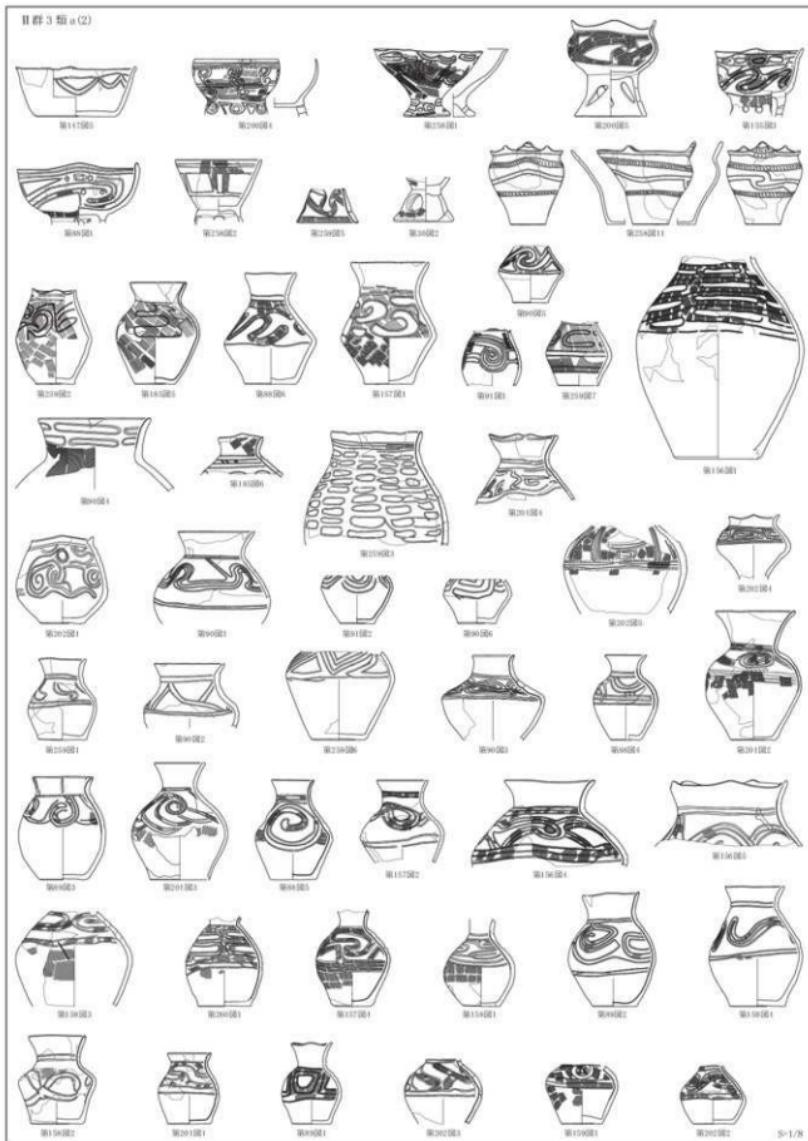


第365図 縄文土器集成図 (1)

1. 繩文時代

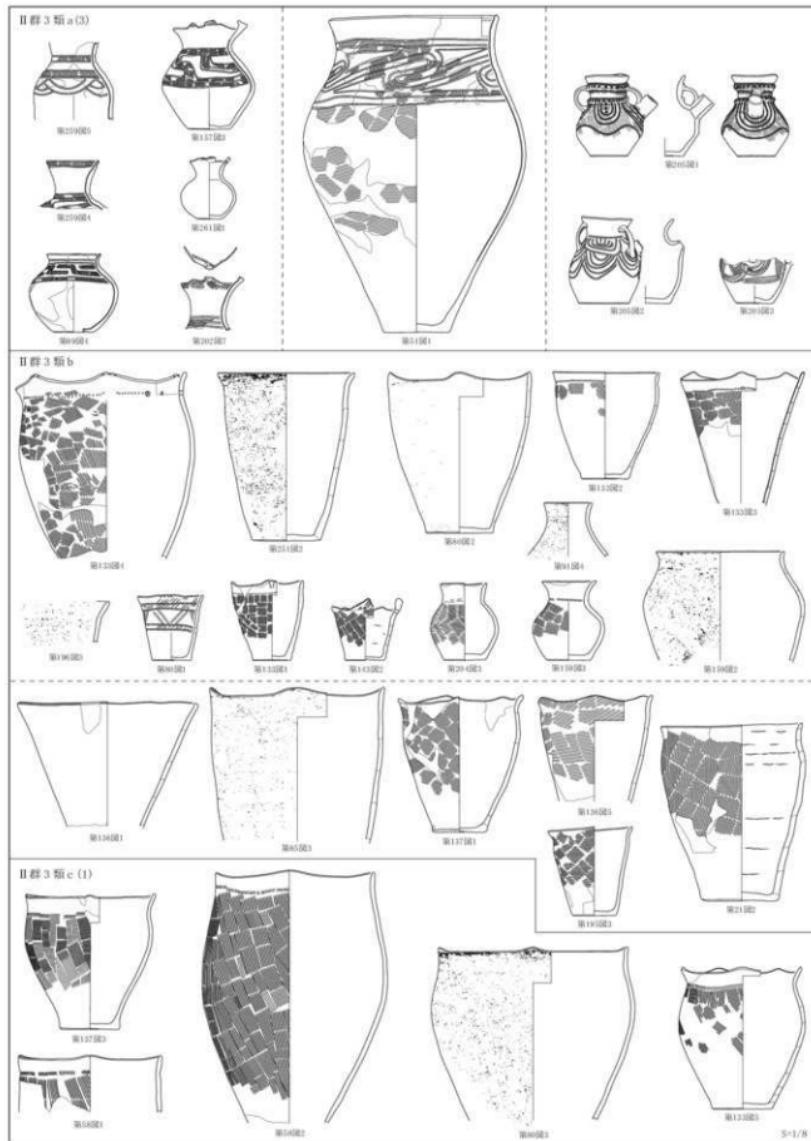


第366図 繩文土器集成図 (2)

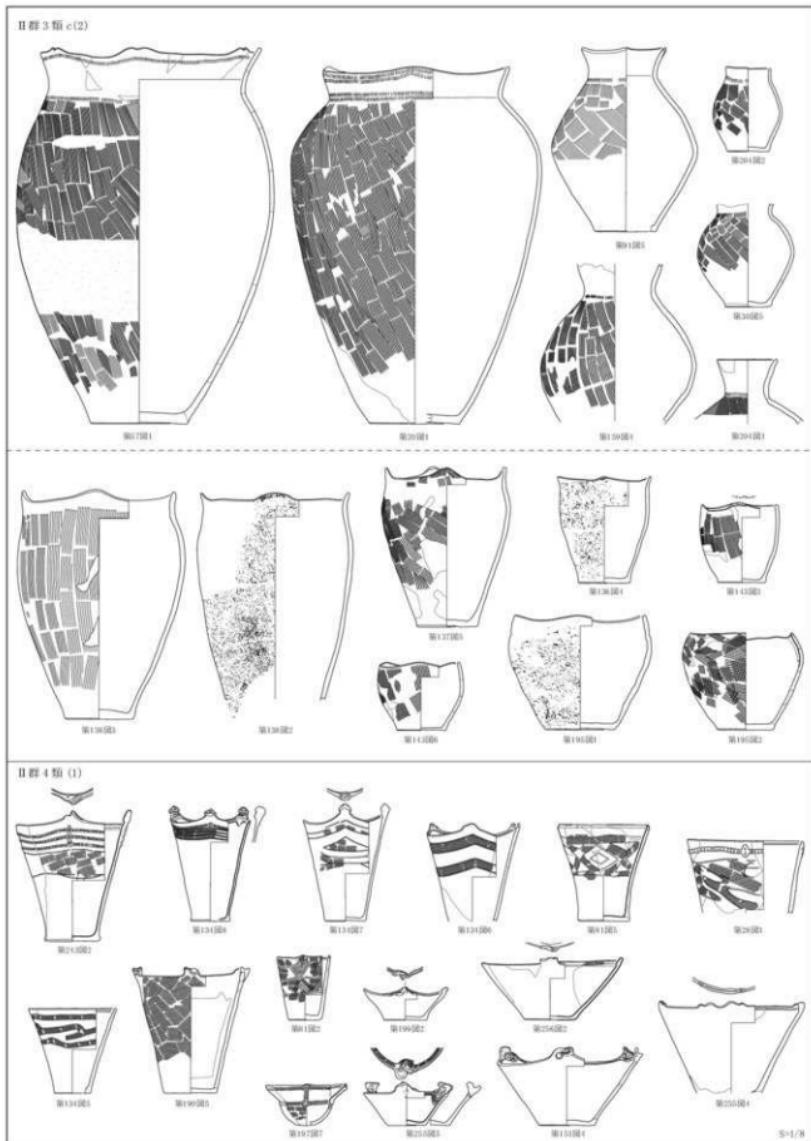


第367図 繩文土器集成図(3)

1. 繩文時代

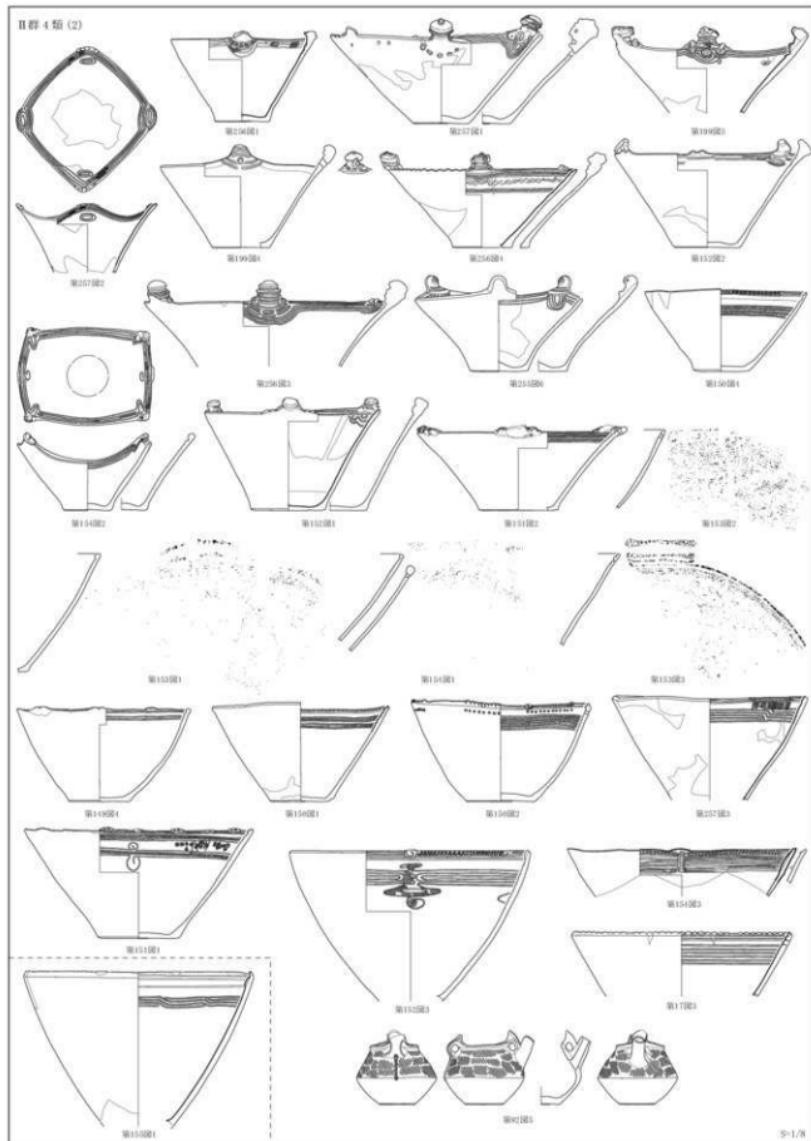


第368図 繩文土器集成図(4)



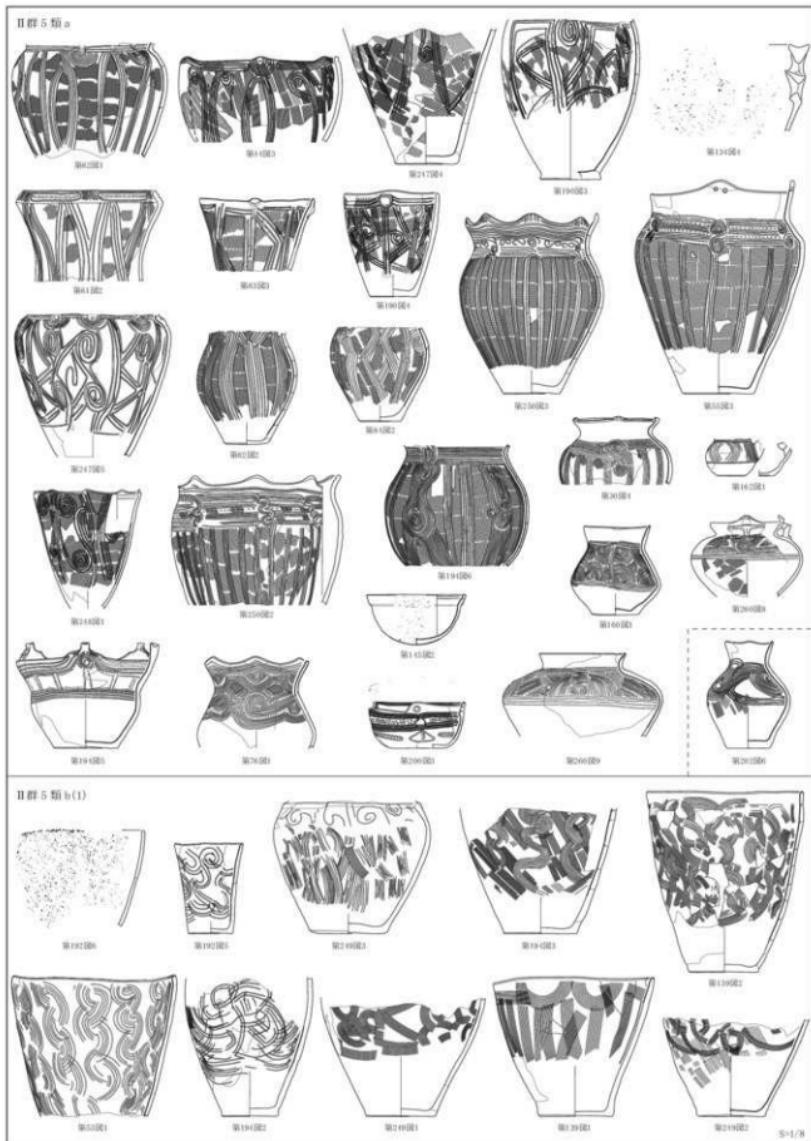
第369図 繩文土器集成図 (5)

1. 繩文時代



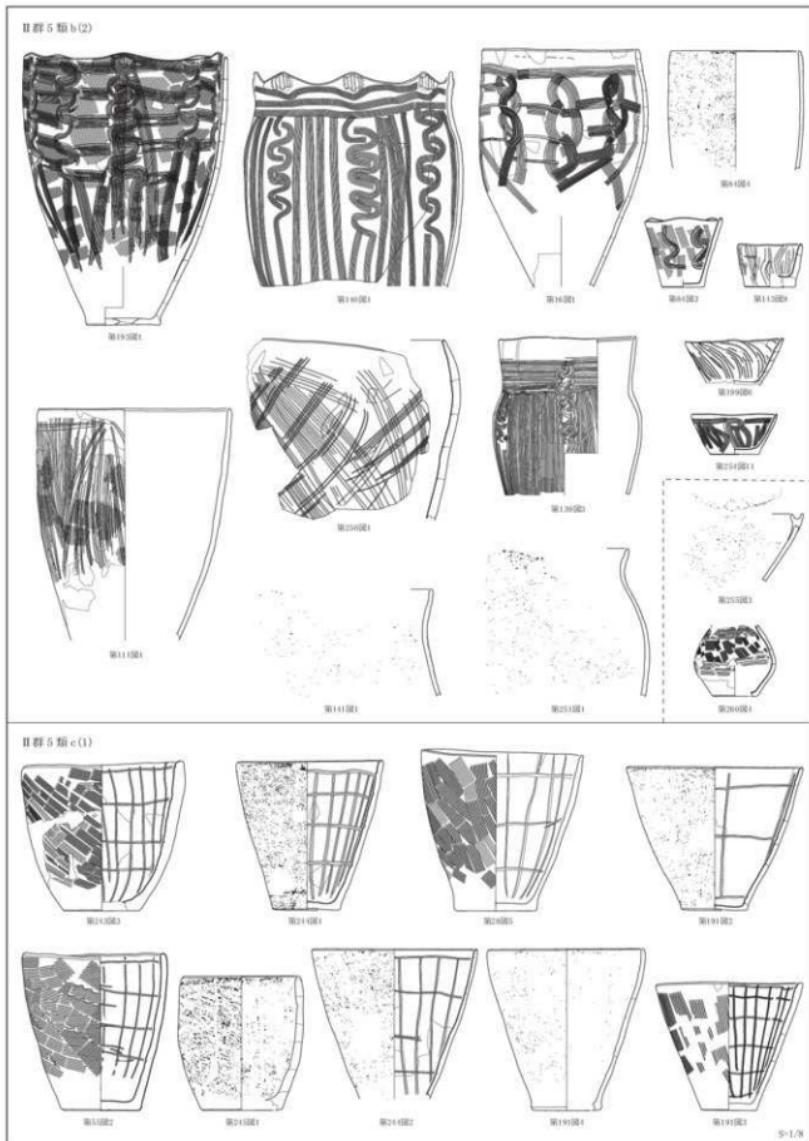
第370図 繩文土器集成図 (6)

5/18

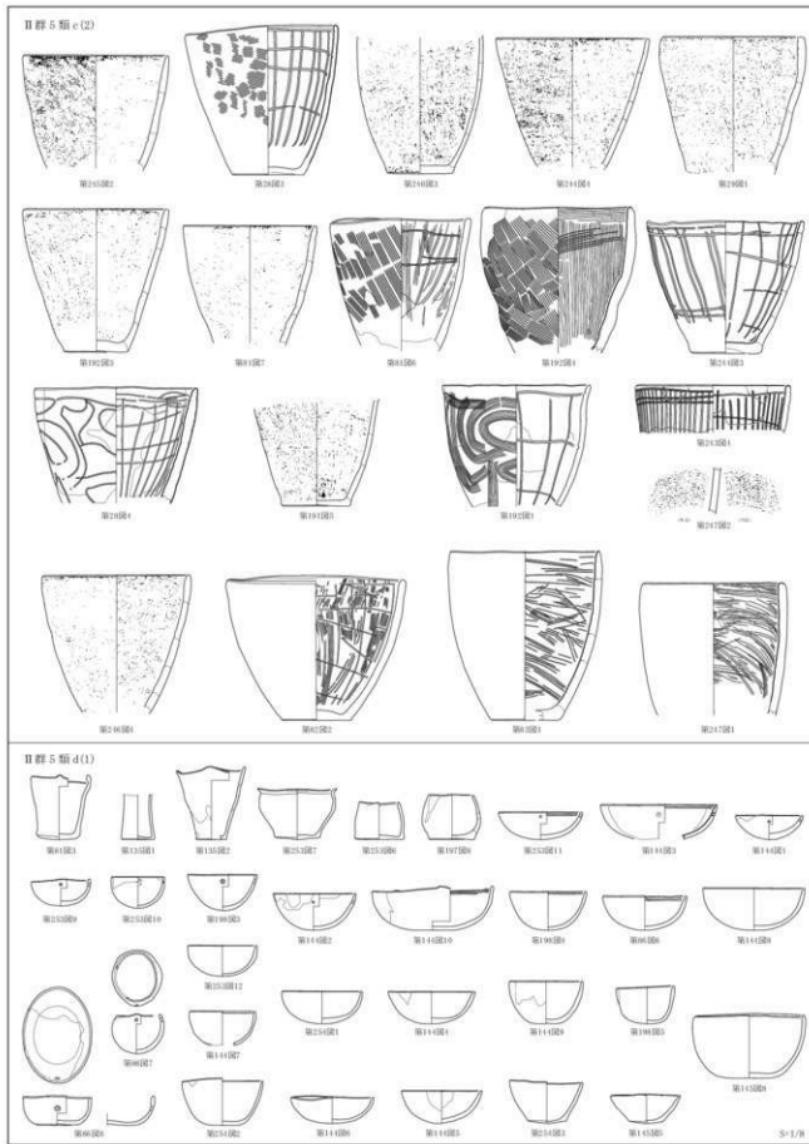


第371図 繩文土器集成図 (7)

1. 繩文時代

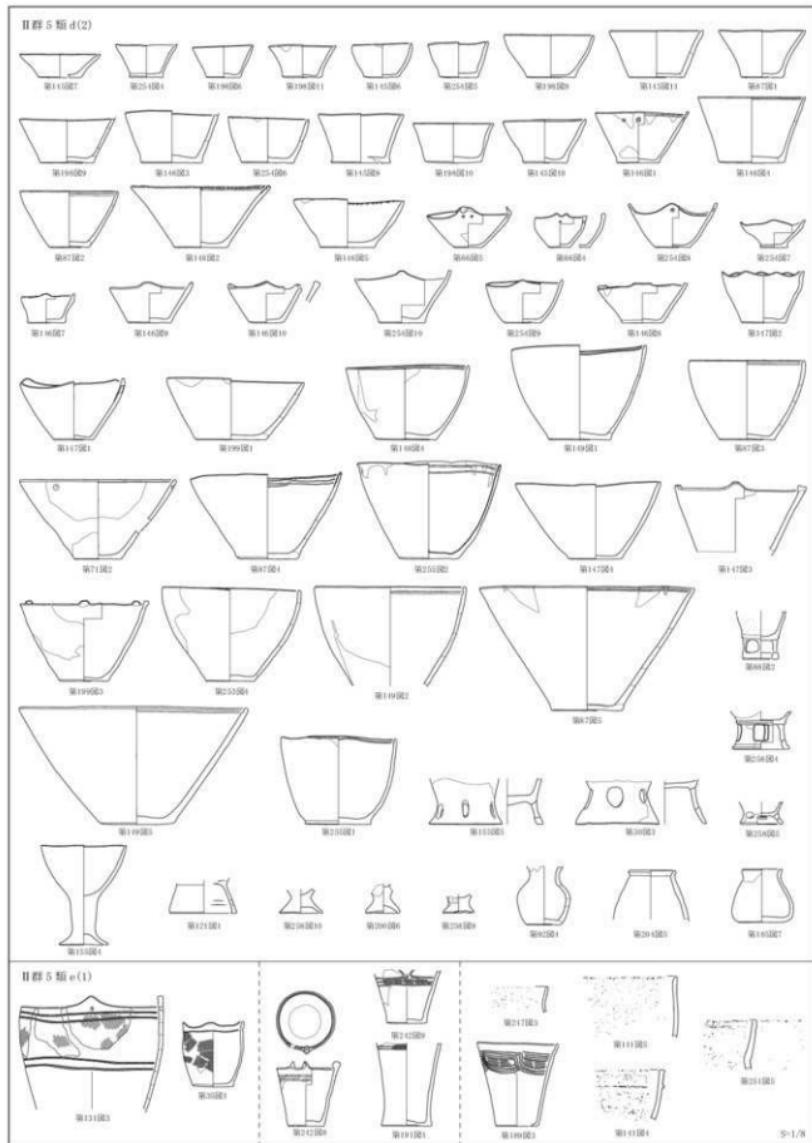


第372図 繩文土器集成図 (8)

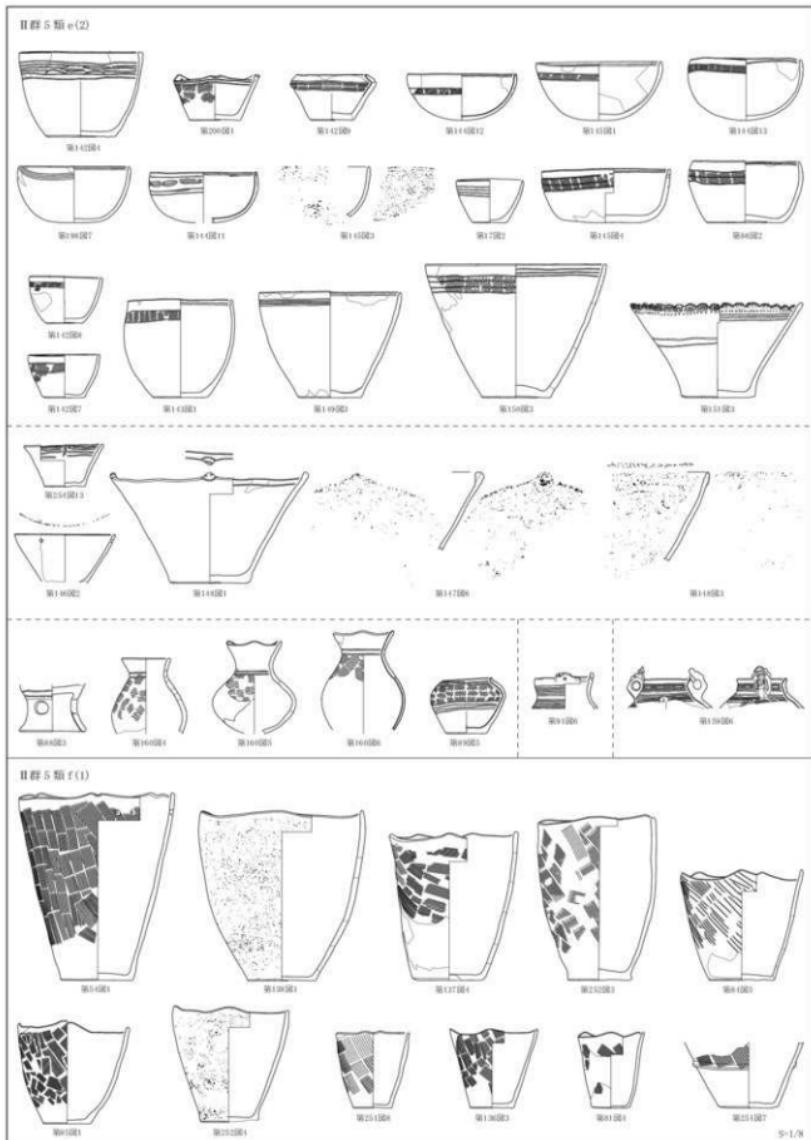


第373図 繩文土器集成図(9)

1. 繩文時代

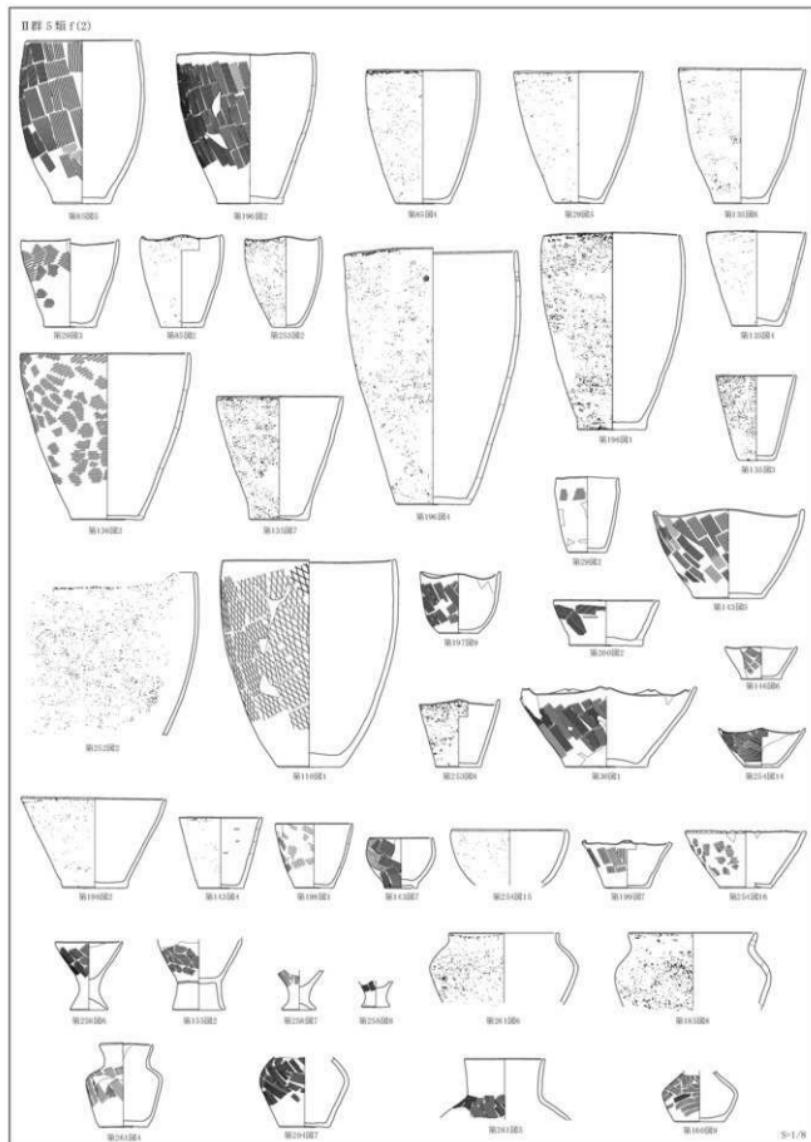


第374図 繩文土器集成図（10）

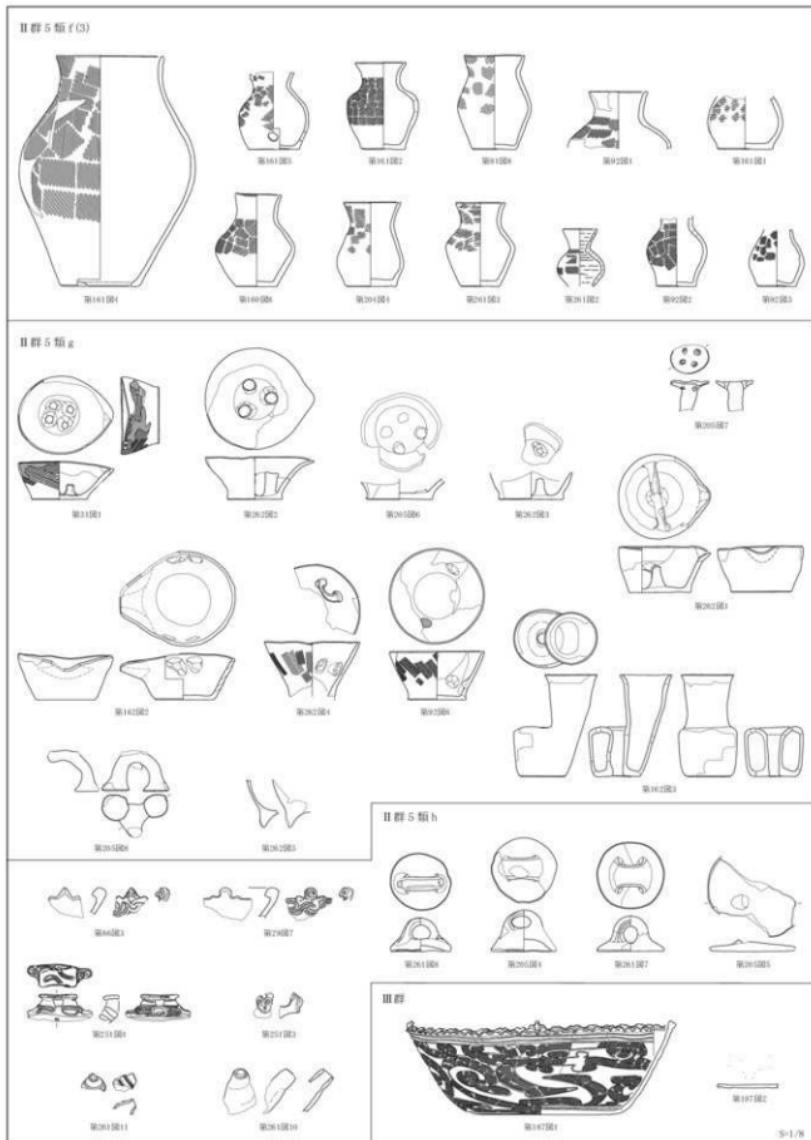


第375図 繩文土器集成図 (11)

1. 繩文時代



第376図 繩文土器集成図 (12)



第12表 仙台灣（名取川下流域）の縄文時代後期前半を中心とする土器変遷

後期前半	後期前半				後期前半				後期前半				後期前半			
	後期前半		後期前半		後期前半		後期前半		後期前半		後期前半		後期前半		後期前半	
	I - 1	I - 2	II - 1	II - 2	III - 1	III - 2	IV - 1	IV - 2	V - 1	V - 2	V - 3	V - 4	VI - 1	VI - 2	VI - 3	VI - 4
穴反山遺跡（仙台市教委 1987） 〔9a～9c型〕																
下ノ内遺跡（仙台市教委 1996） 〔III群土器〕																
大野山遺跡（本郷） 〔II群土器〕																
伊古山遺跡（仙台市教委 1995） 〔免含陶〕																
下ノ内遺跡（仙台市教委 2000） 〔II群土器〕																
【東北原式】																
十櫛内・大湯系 醜原系・赤堀系 高条系・田中系																
【圓窓系】																
靴之内・加曾利丘系 【後北原式】																
三十槌窓系 南三十三槌窓系 繩文系																
【白石窓】																
方形窓系 内面に舟子目状文様を施す深鉢 輪郭式深鉢系 地文透写文 後期的繩土器																

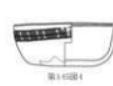
II-1期 後半		三十稻場新段階 (太く浅い沈線) 下ノ内浦 ①		
II-2期 前半			仙台湾 (南三十稻場系) 第61回②	三十稻場新段階 (太く浅い沈線) 下ノ内浦 ①
II-2期 後半	仙台湾 (南三十稻場系) 第61回②	第1回③	仙台湾 南三十稻場古段階 (口縁部突起・貫通孔 脚部充填彫文) 下ノ内浦 ④	仙台湾 (仙台湾) 網取II式 下ノ内浦 ⑤
II-3期 前半	第61回③	第1回④	仙台湾 南三十稻場古段階 (脚部充填彫文) 下ノ内浦 ⑥	仙台湾 網取II式系 下ノ内浦 ⑦
II-3期 後半	第61回④	南三十稻場古段階～新段階移行期 (多条細沈線文化)	仙台湾 (東北南部・南三十稻場系) 第8回⑧	仙台湾 (東北南部系) 第24回⑨
II-4期 前半	第100回⑩	下ノ内浦 ⑩	第1回⑪	仙台湾 (東北南部系) 第110回⑫
II-4期 後半	第100回⑪	南三十稻場新段階 (口縁部突起形鉢化 頸部区画 刺突突・矢羽根状文) 下ノ内浦 ⑬	第11回⑬	仙台湾 中心(細密化) 第11回⑭
後期中葉 初期	第75回⑮	第11回⑯	第20回⑯	第20回⑰
			第20回⑱	第20回⑲
			第20回⑲	第20回⑳
			第20回㉑	
				5/1/10
下ノ内浦遺跡 [1996] 出土土器 ① 206頁-1 ② 285頁-2 ③ 369頁-3 ④ 177頁-2 ⑤ 254頁-1 ⑥ 294頁-1 ⑦ 292頁-1 ⑧ 260頁-1 ⑨ 249頁-3 ⑩ 373頁-1 ⑪ 294頁-3 ⑫ 255頁-1 ⑬ 260頁-4 ⑭ 256頁-9 ⑮ 203頁-1 ⑯ 206頁-2				

第378図 仙台湾 下ノ内浦遺跡 [1996]・大野田遺跡 多条細沈線文土器 変遷試案



II-2期 後半中心		
II-3期 中心		
II-4期 中心		
後期中葉 初頭		

第380図 内面に格子目状沈線を施す深鉢 変遷試案

関東系		東北北(中)部系			
II-4期 前半					
II-4期 後半					
					
後期 中葉初頭					
					

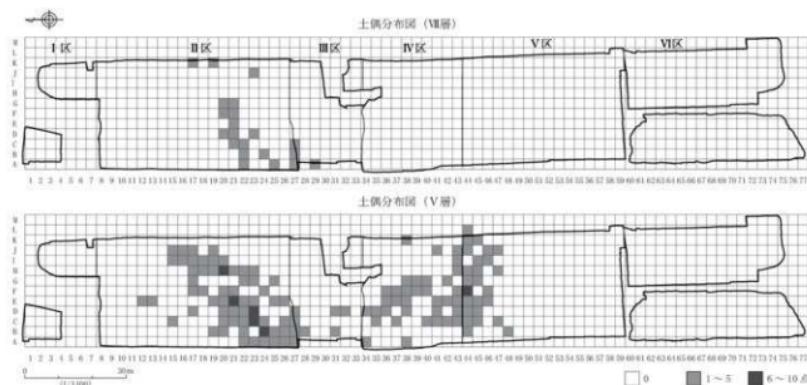
第381図 大野田遺跡出土の異系統土器を中心とする変遷試案

2) 土偶

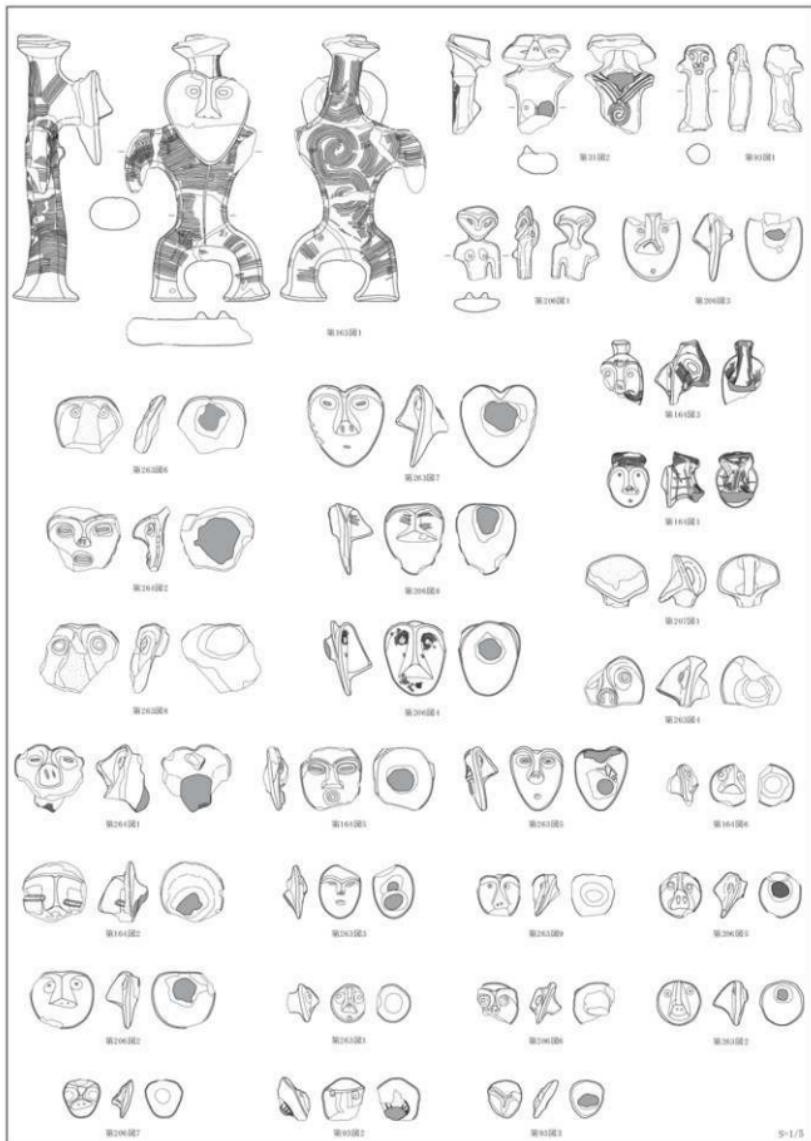
本遺跡出土の土偶はいずれも中実、脚部が短く広がり安定し自立することができるものが多い。文様は櫛齒状沈線や細めの多条沈線で満巻文やS字文を施文するものが主体である。これは本遺跡出土の土器群の文様と一致する。これらの要素は頭部(顔面)も含めていわゆるハート形土偶と一致する部分もある。胸部の形状は脚部に比べて統一性はあまり感じられない。脚部は直角に曲がるものには、短いものと端部を丸く收めるものがある。胸部の形状は脚部に比べて統一性はあまり感じられない。脚部の断面形は梢円形を呈するものが多く東北北部に近い。胸部は細いものが多く正中線のあるものはすべて沈線で表現され腹部が膨らむものはほとんどない。本遺跡で特徴的なものは後頭部に相当する部分が長く伸び頂部に隆線で満巻文が施文される。結髪あるいは被り物であろうか。後頭部に棒状の把手が付くものもある。大型のものは30cm前後である。主に中・小形のものには製作時に粘土を巻きつける輪棒の痕跡が見られるものがある。中・大形のものには胸部上・下に凹状、凸状の接合痕跡が明瞭なものが存在する。胎土は通常の土器と差はない。下ノ内浦遺跡[1996]では20点ほど出土し、文様は比較的多い沈線文が多い。伊古田遺跡[1995]では胸部が長く、胸部は直角に曲がり、大形のものは40cmを超え、自立することが難しい。また座位の土偶が出現する。文様は刺突文が多い。本遺跡出土の土偶は頭部の形状など伊古田遺跡[1995]の土偶に引き継がれていく部分も多い。

本遺跡の土偶は文様から東北地方南部の土器と連動する。この様な文様構成をとる土偶の分布は東北地方南部のほか堀之内1式圏内の北関東を中心とする関東地方や長野県北東部・新潟県南西部まで及ぶ。長野県北東部は堀之内1式、信州系小仙塚類型の中心地とされ新潟県南西部の初期の南三十稻場式に影響を及ぼしたとされる。土偶は文様を施文する部分が限られるなど、土器文様と同一歩調をとることは限らないが、概ね南境II-3期を中心とする時期と考えられる。仙台湾に見られる後期前葉土偶の出現時期は南境II-2期前半と思われる。沈線文は後半になるほど福島県浜中通りや関東東部のハート形土偶に比べてより細沈線化(櫛齒状化)傾向にあると思われる。

掲載土偶111点、頭部29点、胸部6点、胸部29点、脚部14点、脚部?1点、頭部から胸部4点、胸部から胸部13点、胸部から脚部11点、頭部から胸部・腕部2点、胸部から胸部・脚部1点、左腕部と頸部を除きほぼ完形1点、他アスファルト接着痕7点。その他未掲載土偶は可能性の高いものを含めて221点。未掲載土偶はそのほとんどが小破片である。全332点の残存部位は頭部・頭部?58点、胸部・胸部?63点、腕部・腕部?66点、脚部・脚部?110点、頭部から胸部4点、胸部から胸部14点、胸部から脚部13点、3か所以上残存4点、他アスファルト接着痕14点。その他土偶の可能性のある一次選別の資料には粗いユビナデ整形のみの特殊土器の破片(内面底面などに付く突起や横位に懸架する棒状のもの)と思われる資料が30点ほどある。

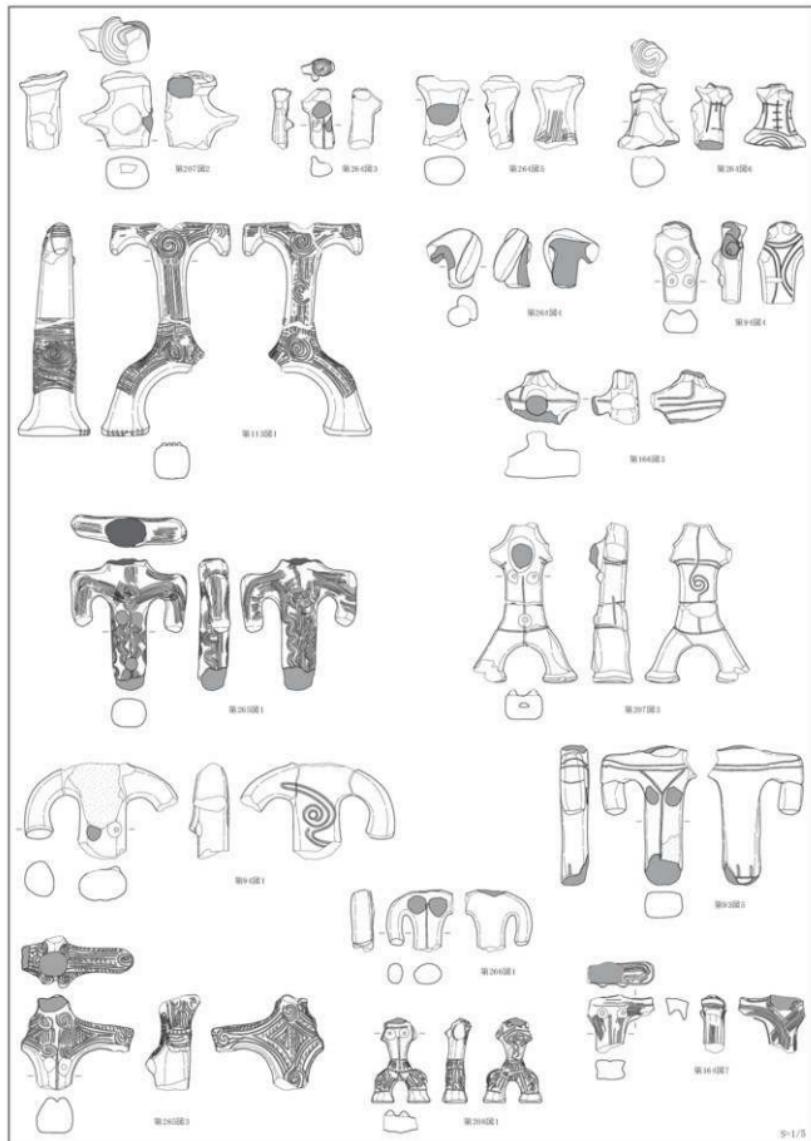


第382図 土偶分布図

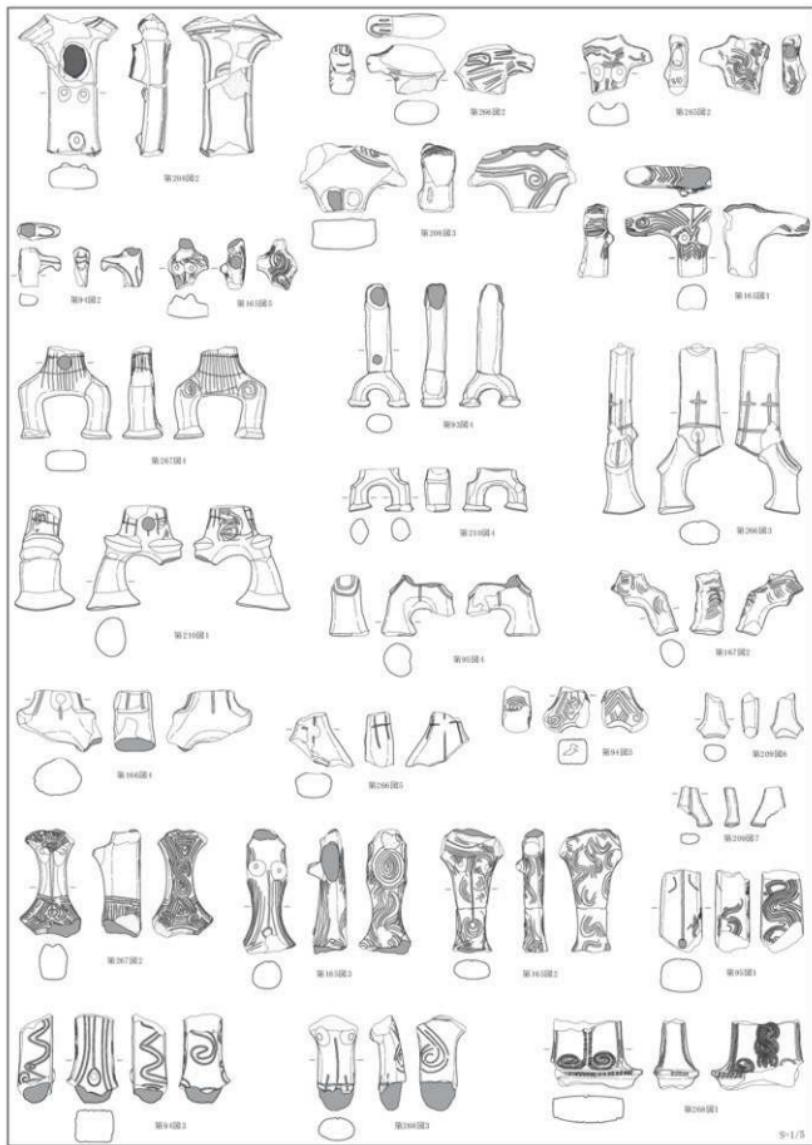


第383図 土偶集成図(1)

1. 繩文時代

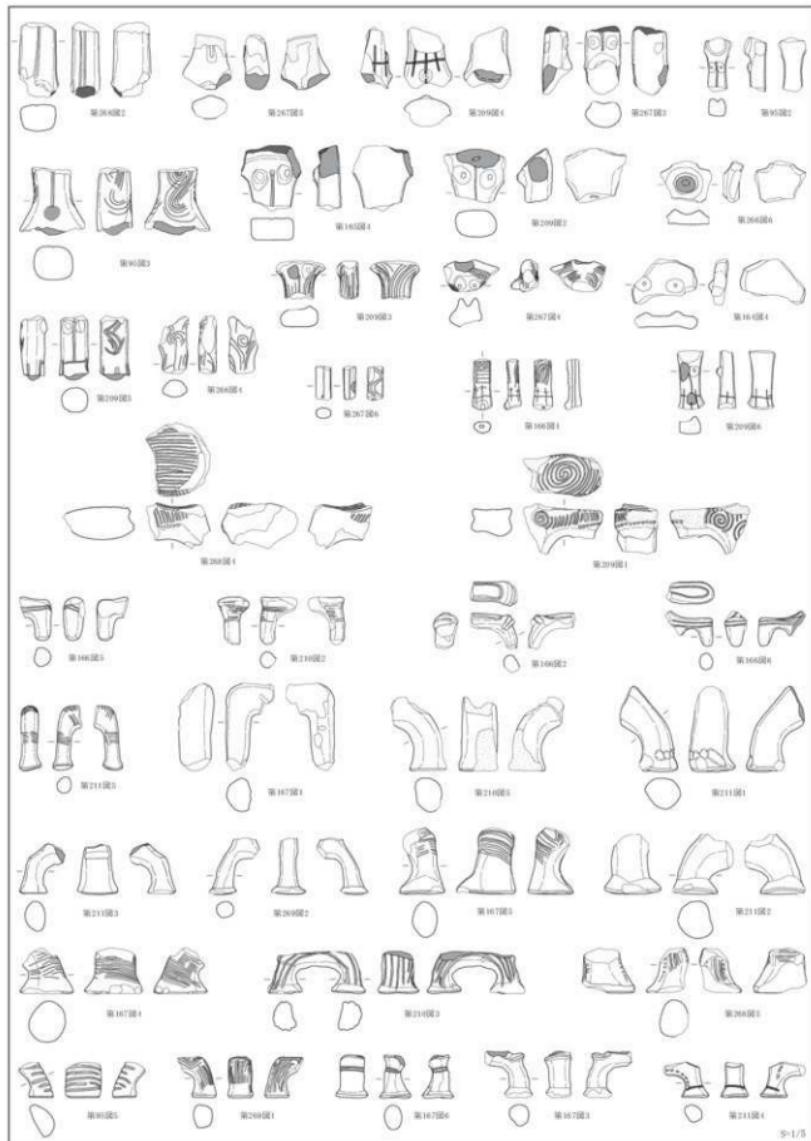


第384図 土偶集成図(2)

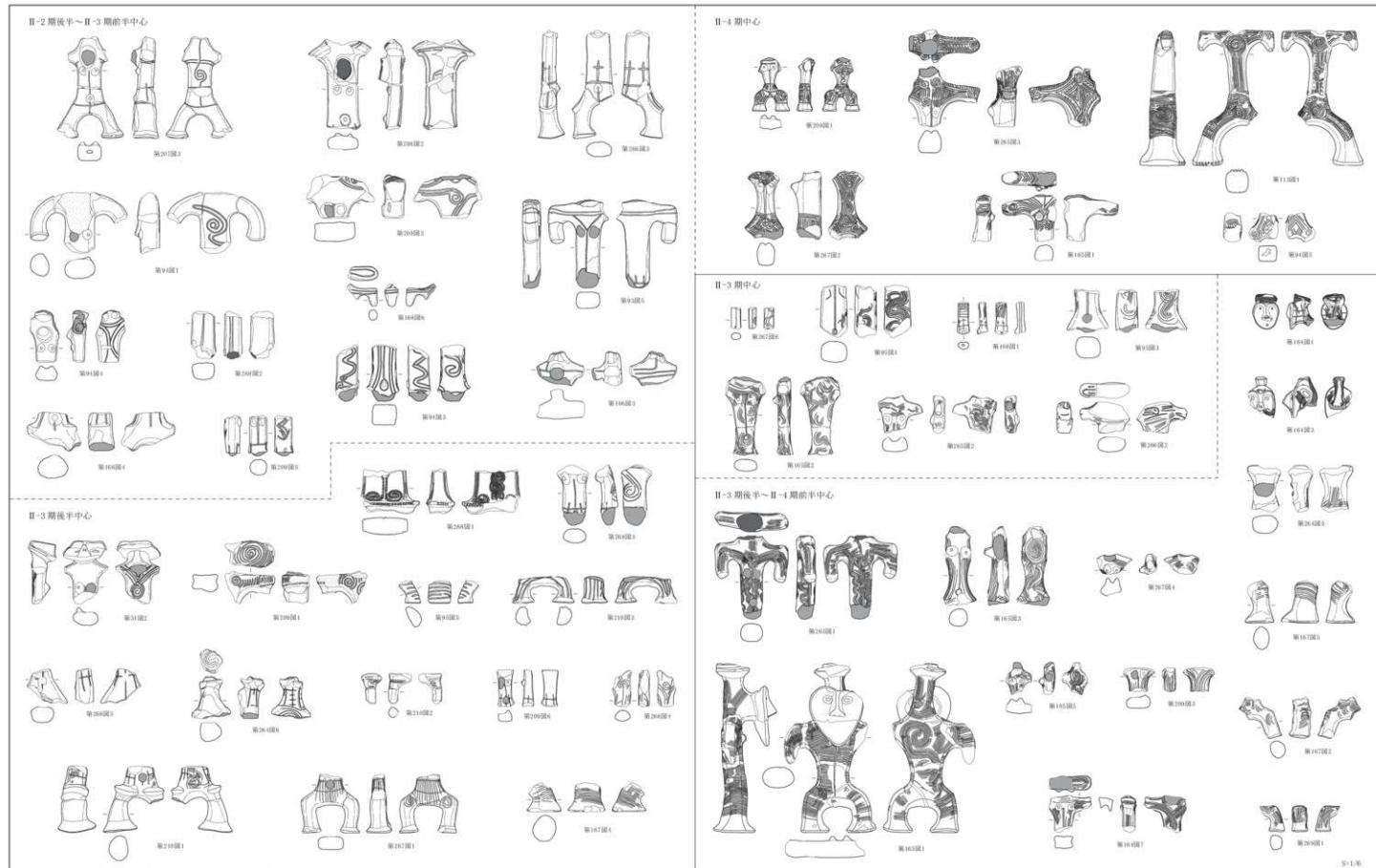


第385図 土偶集成図(3)

1. 繩文時代



第386図 土偶集成図(4)



第387図 文様から見た土偶 変遷試案

3) 土製円盤

土製円盤は全部で 7,186 点出土している。V 層からの出土が圧倒的に多いが、VII 層からも少量出土している。I 層や III 層からも出土しているが、いずれも遺構の掘削などを要因とした下層からの混入とみられる事から、本来、これらは V 層に帰属するものと考えられる。各層とも II 区から V 区にかけて出土が確認されており、調査区南北端の I 区と VI 区では出土していない。

V 層からは 5,151 点出土している。これを地区別にみると、II 区がもっとも多く、次いで IV 区、V 区、III 区の順となる。遺物包含層（基本層序 V 層）からは 1,788 点出土しているが、このうち 1,533 点は II 区から出土したものである。遺構からは 2,383 点出土している。SR201 で 1,694 点、SR501 で 591 点と一部の遺構で多量の出土がみられるが、そのほかの遺構ではわずかに散見される程度である。

VII 層からは 683 点出土している。地区別にみた出土量では、II 区がもっと多く、次いで IV 区、III 区、V 区の順となる。遺構からは 101 点出土しているが、いずれも数点程度であり、特定の遺構に集中する傾向はみられない。

土製円盤は、孔の有無や孔の貫通・非貫通の違いで a ~ c 類の 3 類に大別した。a 類は孔が開いていないもの、b 類は孔が開いているもの、c 類は非貫通の孔が穿たれているものである。

a 類は 6,982 点（全体の 97.2%）、b 類は 150 点（2.1%）、c 類は 54 点（0.7%）出土しており、このうち 146 点を図示した。

a ~ c 類は、孔の違いだけで、大きさも平面形態の種類もほぼ同じである。平面形態では、多角形を呈するものがもっとも多く 4,902 点（全体の 91.2%）、円形が 263 点（4.9%）、不定形が 66 点（1.2%）、橢円形が 65 点（1.2%）、正方形が 50 点（0.9%）、三角形が 28 点（0.5%）、長方形が 3 点（0.1%）出土している。

このうち不定形については、孔のない a 類では通常の土器片との識別がつかないため抽出しなかったが、b・c 類では全体に占める不定形の比率は高い。b 類では 40.3%、c 類では 40.9% が不定形である。今後、検討できる資料の増加を待たねばならないが、該当する遺物として抽出できないだけで、本来は a 類にも不定形がともなっている可能性が考えられる。

土製円盤の具体的な用途については不明であるが、基本的に a 類があり、必要に応じて a 類を穿孔して b 類を作出しているものと想定される。c 類については、数は少ないが貫通孔と非貫通孔が混在する個体があることから、b 類の未製品である可能性が高い。

第 13 表 土製円盤の平面形態別一覧表

分類 \ 平面形態	A 四 角	B 楕円形	C 正方形	D 長方形	E 多角形	F 三角形	G 不定期	合 計
a 類	247	64	45	0	4,828	18	—	5,212
b 類	6	1	3	2	50	9	48	119
c 類	9	0	2	1	13	1	18	44
合 計	263	65	50	3	4,902	28	66	5,375
比 率	4.9%	1.2%	0.9%	0.1%	91.2%	0.5%	1.2%	100.0%

第 14 表 土製円盤 b・c 類の穿孔箇所別一覧表

分類 \ 穿孔箇所	I 中央	II 中央から ずれる	III 場部	合 計
b 類	70	39	10	119
b 類での比率	58.8%	32.8%	8.4%	100.0%
c 類	21	22	1	44
c 類での比率	47.7%	50.0%	2.3%	100.0%

第 15 表 土製円盤 c 類の穿孔面別一覧表

分類 \ 穿孔面	I 外 面	II 内 面	III 外内面	合 計
c 類	30	5	9	44
比 率	68.2%	11.4%	20.4%	100.0%

第 16 表 土製円盤の地区別一覧表

部位 \ 地区	I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区	VI 区	不 明	合 計
I 层	0	55	0	7	2	0	15	79
II 层	0	162	16	278	13	0	300	769
III 层	0	2,696	39	785	556	0	115	5,151
IV 层	0	602	22	89	2	0	8	683
V 层	0	313	23	62	28	0	78	504
VI 层	0	4,788	100	1,181	601	0	516	7,186
不 明	0	66.6%	1.4%	16.4%	8.4%	0.0%	7.2%	100.0%
合 計	0	6,982	0	1,788	0	0	0	5,375
比 率	0.0%	66.6%	1.4%	16.4%	8.4%	0.0%	7.2%	100.0%

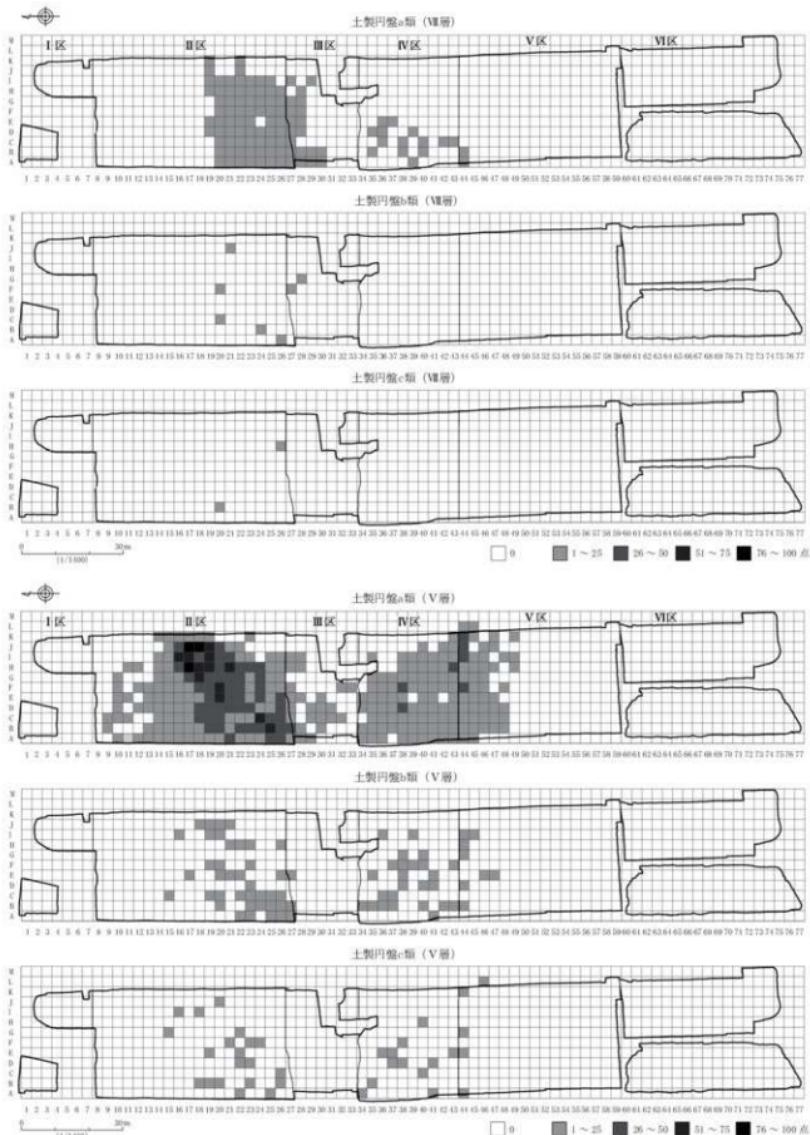
1. 繩文時代

第 17 表 土製円盤の分類別一覧表

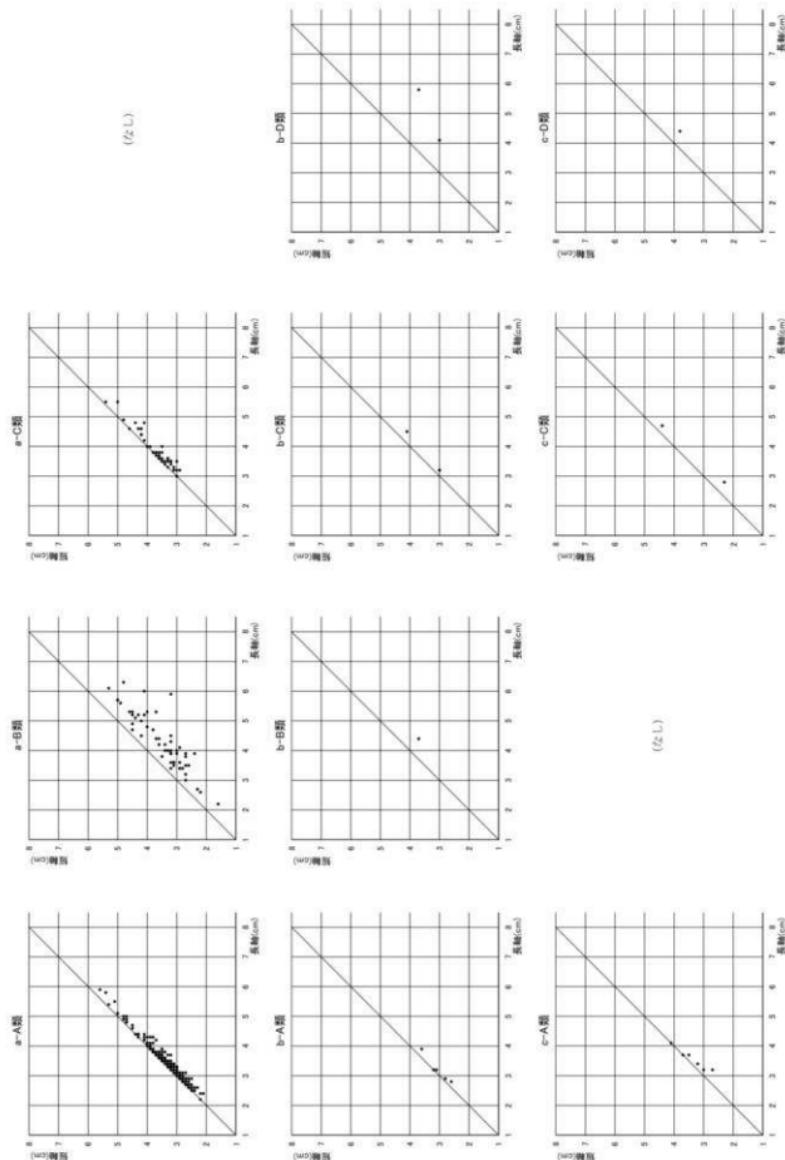
分類 \ 層位	I 层	II 層	V 层	VII 层	不明	合計	分類 \ 層位	I 层	II 層	V 层	VII 层	不明	合計
a-A	6	50	164	12	15	247	c-B3b						0
a-B	2	7	44	6	5	64	c-B3f						0
a-C		4	36	3	2	45	c-B3bf						0
a-D						0	c-C1b						0
a-E	56	429	3,523	498	332	4,838	c-C1f						1
a-F			14	1	3	18	c-C1bf						0
a-G						0	c-C2b						0
a-欠損	14	272	1,294	152	128	1,779	c-C2f						0
合計	78	762	4,985	672	485	6,982	c-C2bf					1	1
a 個の比率						97.2%	c-C3b						0
b-A1			5			5	c-C3f						0
b-A2			1			1	c-C3bf						0
b-A3						0	c-D1b						0
b-B1			1			1	c-D1f						0
b-B2						0	c-D1bf						0
b-B3						0	c-D2b						0
b-C1			2			2	c-E2f					1	1
b-C2				1		1	c-E2bf						0
b-C3						0	c-E3b						0
b-D1		1				1	c-E3f						0
b-D2						0	c-E3bf						0
b-D3			1			1	c-E1b						0
b-E1		3	22	1	3	29	c-E1f					4	1
b-E2	1		15	2	1	19	c-E1bf						0
b-E3			2			2	c-E2b						1
b-F1		4	1			5	c-E2f					4	4
b-F2		2	1			3	c-E2bf					2	2
b-F2 + c-F1f		1				1	c-E3b						0
b-F3						0	c-E3f						1
b-G1			23			4	c-E3bf						0
b-G2	1	10	1	1		13	c-F1b						0
b-G2 + c-G2b		1				1	c-F1f						0
b-G3			5	2		7	c-F1bf						0
b-欠損	1	23			7	31	c-F2b						0
合計	1	6	118	8	17	150	c-F2f					1	1
b 個の比率						2.1%	c-F2bf						0
c-A1b			1			1	c-F3b						0
c-A1f		4	1			5	c-F3f						0
c-A1bf						0	c-F3bf						0
c-A2b				1		1	c-G1b						0
c-A2f		1				1	c-G1f					6	7
c-A2bf		1				1	c-G1bf					2	2
c-A3b						0	c-G2b						2
c-A3f						0	c-G2f					4	4
c-A3bf						0	c-G2bf					3	3
c-B1b						0	c-G3b						0
c-B1f						0	c-G3f						0
c-B1bf						0	c-G3bf						0
c-B2b						0	c-欠損					10	10
c-B2f						0	合計	0	1	48	3	2	54
c-B2bf						0	c 個の比率						0.7%
総合計								79	769	5,151	683	594	7,196

第 18 表 土製円盤が出土した V・VII 層の主な遺構一覧表 (出土量順)

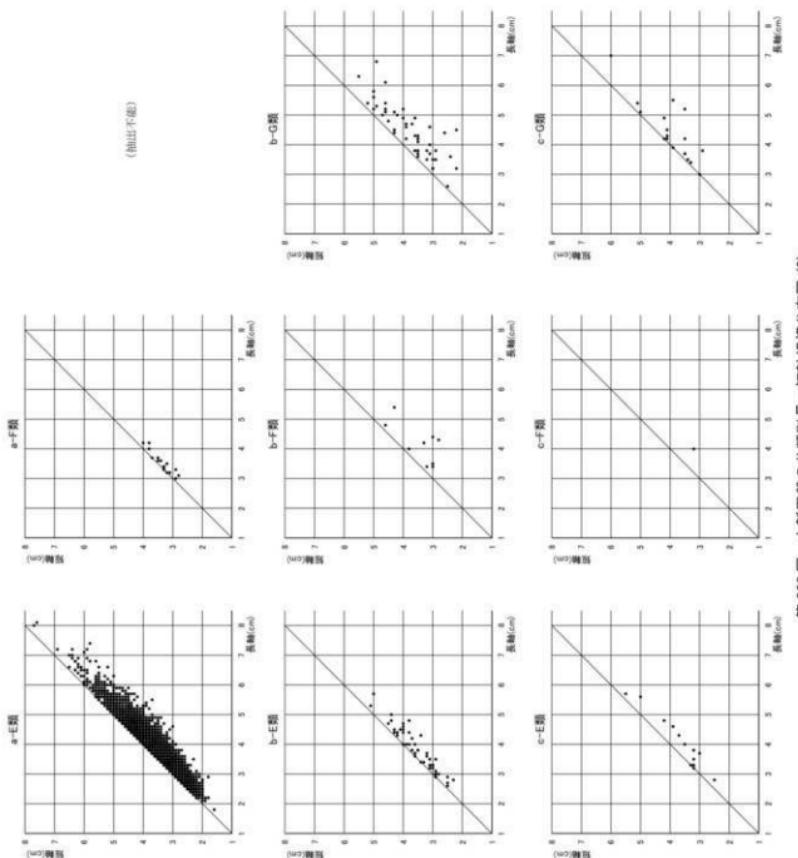
点数 \ V 層	SR201	SR501	401 配石	SR301	404 配石	SE502	SK4122	SK214	包含層 (II 区)	包含層 (IV 区)	包含層 (III 区)	合計
出土点数	1,694	591	31	21	14	13	4	3	1,533	203	11	4,116
V 層の比率	32.9%	11.5%	0.6%	0.4%	0.3%	0.3%	0.1%	0.1%	29.9%	3.9%	0.2%	80.1%
点数 \ VII 層	SK297	298 配石	211 配石	SK251	SK230	SK248	SK264	SK282	SK287	293 配石	SK218	合計
出土点数	8	5	5	5	4	4	3	3	3	2	2	44
VII 層の比率	1.2%	0.7%	0.7%	0.7%	0.6%	0.6%	0.4%	0.4%	0.4%	0.3%	0.3%	6.9%



第388図 土製円盤分布図



第389図 土製円盤の分類別長・短軸規模分布図(1)



第390図 土製円盤の分類別長・短軸規模分布図(2)

4) 土 鍾

土鍾は全部で 109 点出土している。V 層からの出土がもっとも多く 71 点、VII 層から 12 点、III 層から 11 点、層不明 15 点である。このうち 72 点を図示した。

土鍾は、形態や素材の違いで、有溝土鍾 (A ~ S 類)、管状土鍾 (T ~ V 類)、その他土鍾 (W ~ X 類)、土器片鍾の 4 類に大別した。もっとも出土量が多いのは有溝土鍾の 76 点で全体の 69.7% を占める。このうち、無孔は 42 点 (59.2%)、有孔は 29 点 (40.8%) である。

5) その他の土製品

以下、腕輪形土製品・耳飾り・ミニチュア・その他土製品（動物・土笛・鐸・スプーン・舟形土製品）の出土分布図を提示する。

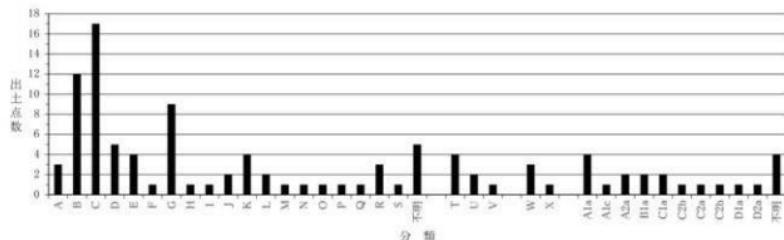
1. 繩文時代

第19表 土錘の地区別一覧表

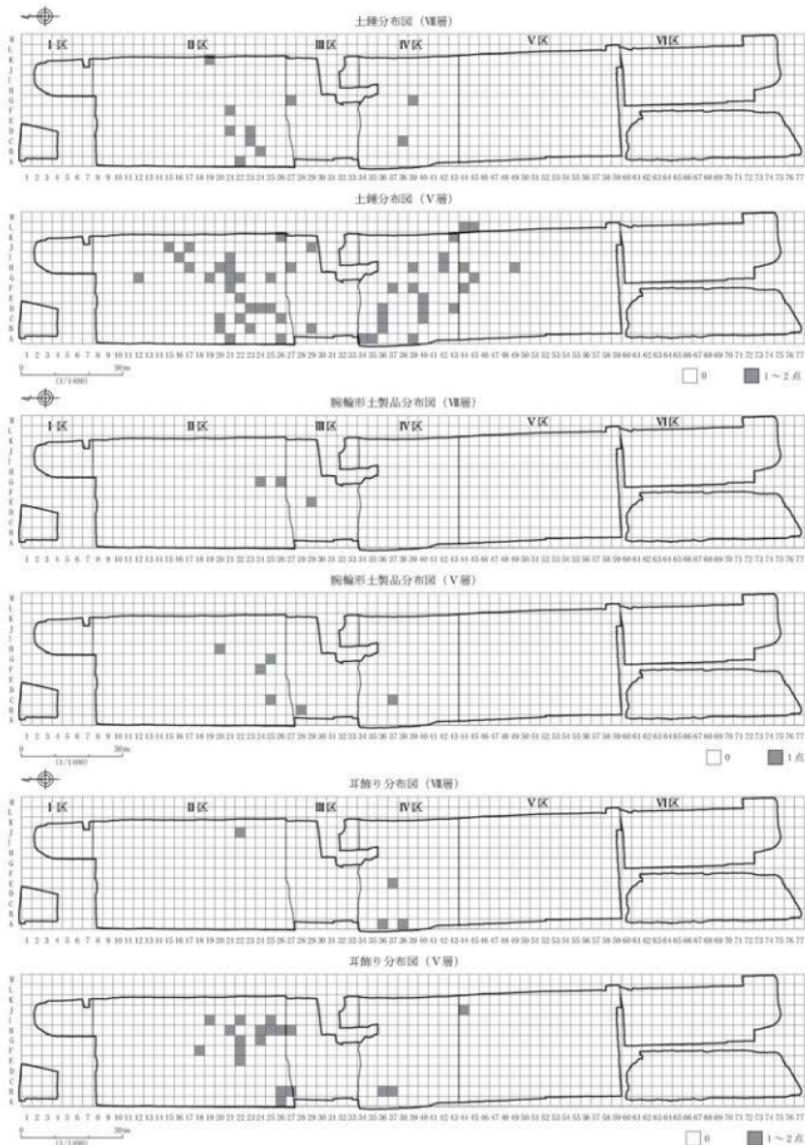
層位	分類	I 区	II 区	III 区	IV 区	V 区	VI 区	不明	合計
Ⅳ 層	有溝土錘	2			5				7
	管状土錘				1				1
	その他の土錘				1				1
	土器片錘	2							2
V 層	合 計	0	4	0	7	0	0	0	11
	有溝土錘		25	3	12	8			48
	管状土錘		4						4
	その他の土錘				2	1			3
	土器片錘	13	1	1	1				16
VI 層	合 計	0	42	4	15	10	0	0	71
	有溝土錘		8		2				10
	管状土錘				1				1
	その他の土錘								0
	土器片錘	1							1
不明	合 計	0	9	0	3	0	0	0	12
	有溝土錘		6	1	3	1			11
	管状土錘		1						1
	その他の土錘								0
	土器片錘	1	2						3
合 計	1	9	1	3	1	0	0	0	15
	総合計	1	64	5	28	11	0	0	109
比率 (%)		0.9%	58.2%	4.6%	25.7%	10.1%	0.0%	0.0%	100.0%

第20表 土錘の分類別一覧表

分類 \ 層位	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	不明	合 計	分類 \ 層位		Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	不明	合 計		
							T	U								
無 孔	A		3		1	4	管状土錘	T	4					4		
	B	5	4	3	12			U	1	1				2		
	C	2	11	2	2	17		V			1	1		1		
	D	1	3	1		5		合 計	1	4	1	1	1	7		
	E	3		1	4			管状土錘の比率						6.4%		
	F			1	1			Y	1	2				3		
	G	2	4	1	2	9		X		1				1		
	H		1			1		合 計	1	3	0	0		4		
	I	1			1			その他の土錘の比率						3.7%		
	J	2			2			A1a						4		
有 孔	K	4			4			A1c						1		
	L	2			2			A2a	2		1	3				
	M			1	1			B1a	1	1	1	3				
	N	1			1			C1a	1	1		2				
	O	1			1			C1b			1	1				
	P	1			1			C2a		1		1				
	Q	1			1			C2b		1		1				
	R	3			3			D1a	1			1				
	S	1			1			D2a		1		1				
	不明	1	2	2	5			不明		4		4				
合 計		7	48	10	11	76	合 計		2	16	1	3	22			
有溝土錘の比率																
総合計																

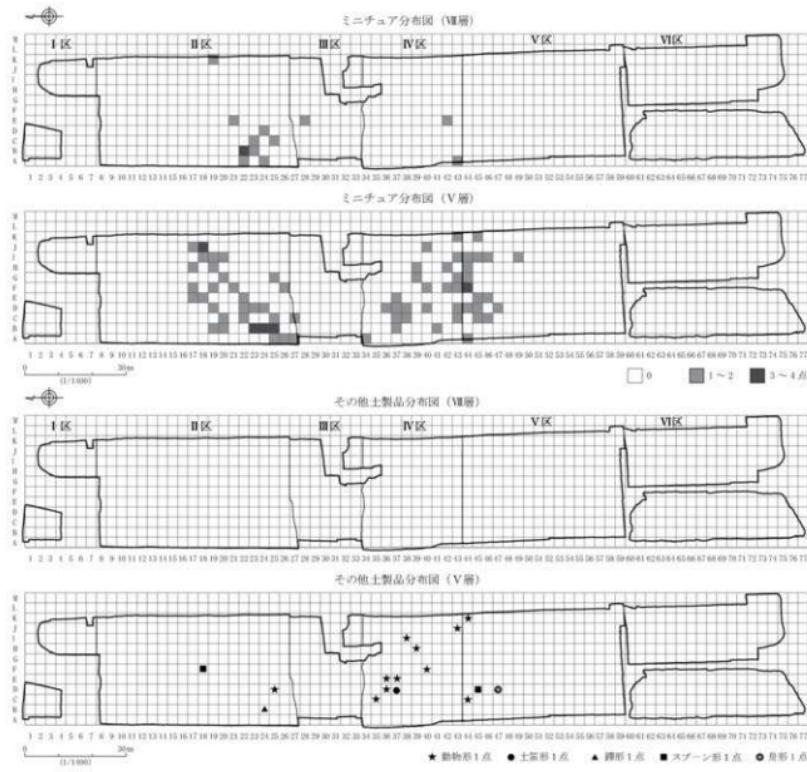


第391図 土錘の分類別出土点数



第392図 土製品分布図(1)

1. 繩文時代



第399図 土製品分布図(2)

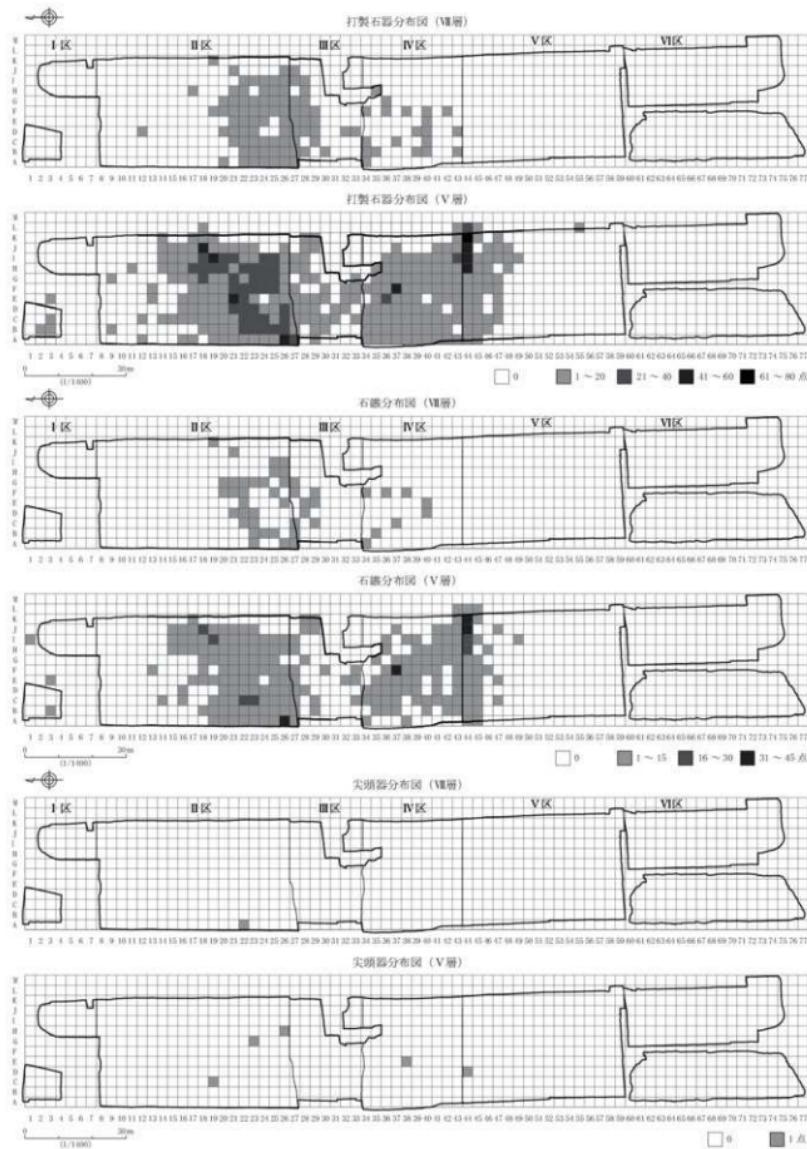
6) 打製石器

打製石器に関しては膨大な資料の中から4,673点のみ抽出したに過ぎず、器種別石材別組成表(第21表)や、石器分布図(第394～第397図)に示した点数は、本遺跡の石器群の特色を全体的に反映しているわけではない。多量にあるはずの剥片・石核はほんの一のみの抽出に留まっている。しかし、二次加工のある石器については、数多く抽出されており、概ね、器種ごとの組成比を反映していると判断される。器種ごとの分布上の偏在性は認められない。石材別に見ると石鐵の玉髓・鉄石英素材の割合が高い。一方、石匙・不定形石器にこれらの石材が使用されることは例外的である。したがって、用いられている玉髓や鉄石英の原石は小型のものであったと考えられる。器種別組成をみると4,673点中1,582点(34%)が石鐵関連資料であり、比率が高い。そのなかで未製品・失敗品としたものが641点、円基状としたものの118点、合わせて759点(48%)が本来の石鐵の規格から外れた資料である。未製品等の比率が高いことは、本遺跡内で石器制作が行われていたことを示している。また、不定形石器(スクレイバー類)の出土量の多さも本遺跡の特徴である。石器使用痕の観察が必要であるが、不定形石器を用いた何らかの作業、たとえば動物の解体なども行われていたと推定される。

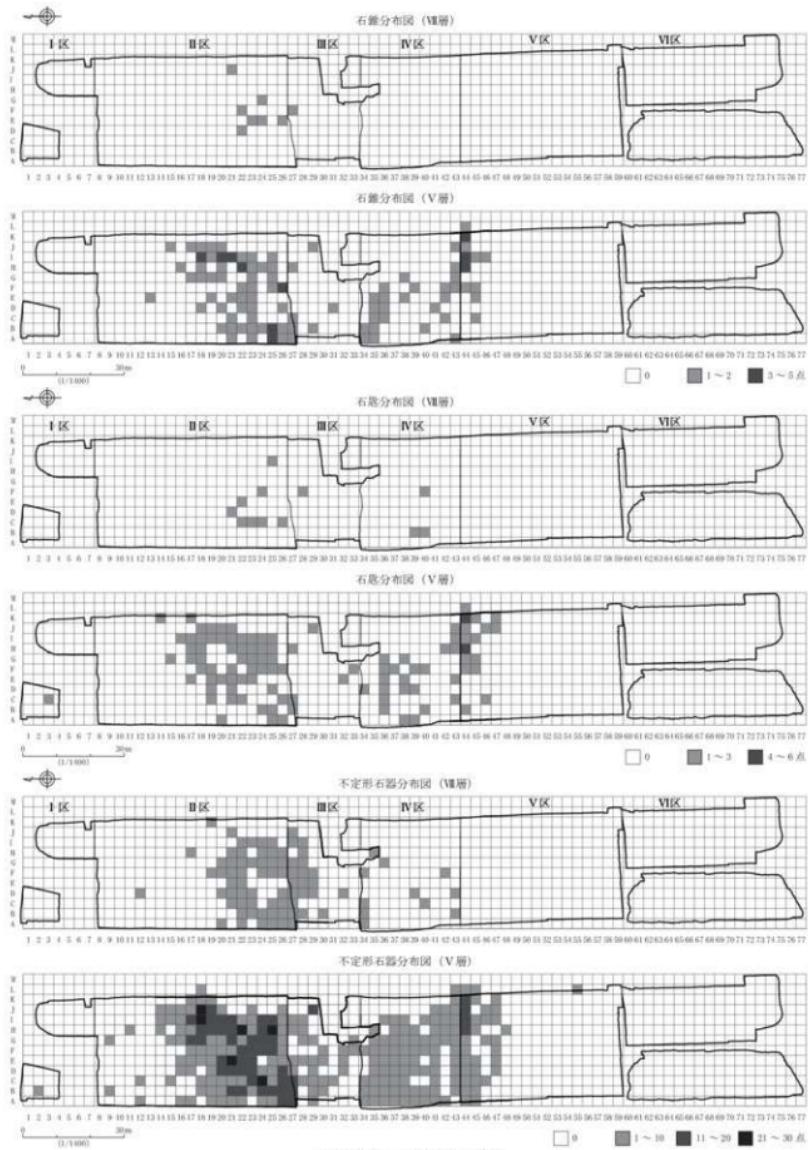
第21表 打製石器の器種別石材組成一覧表

器種	分類	細分	石材									合計		
			黒曜石	赤質質 岩	流紋岩	赤質凝 灰岩	緑色凝 灰岩	铁石英	玉 髓	その他				
石器	有基	Kw-a1-1	2	114	53	9	0	51	48	0	277	567	1,582	
		Kw-a1-2	1	76	52	5	0	30	30	0	194			
		Kw-a1-3	2	5	1	3	0	5	3	0	19			
		Kw-a1-4	0	1	1	0	0	2	1	0	5			
		Kw-a1-5	0	8	4	0	0	9	1	0	22			
		Kw-a1-6	0	12	11	2	0	5	4	0	34			
		Kw-a1-7	0	6	2	0	0	3	1	0	12			
		Kw-a1-8	0	1	0	1	0	1	1	0	4			
	甲基	Kw-a2	1	5	4	0	0	6	0	0	16	186		
	圓基	Kw-a3-1	6	27	9	1	0	15	6	0	64			
	円基状	Kw-a3-2-1	1	26	7	1	0	25	7	0	67	118	118	
		Kw-a3-2-2	0	30	9	0	0	13	3	0	55			
	未製品・失敗品	Kw-a4	1	41	20	4	1	35	16	0	118	641	641	
		Kw-a5	8	286	68	18	2	157	102	0	157			
		Kw-a6	3	15	17	2	0	5	12	0	54			
尖頭器	有基	Kw-b1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	9	
	無基	Kw-b2	0	7	1	1	0	0	0	0	9			
	欠損分類不可	Kw-b3	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
		Kw-c1	0	14	2	0	0	0	0	0	16			
石錐	棒狀	Kw-c2-1	0	21	1	0	0	0	0	0	22	168	198	
		Kw-c2-2	0	14	0	0	0	0	0	0	14			
		Kw-c2-3	0	43	3	1	0	3	1	0	51			
	つまみ付き	Kw-c2-4	0	53	11	2	0	11	4	0	81			
		Kw-c3	0	11	2	0	0	0	2	0	14			
	欠損分類不可	Kw-d1	0	26	1	0	0	2	1	0	30			
石器	縦型	Kw-d1-2	0	47	3	1	0	0	2	0	53	139		
		Kw-d1-3	0	17	2	0	0	0	0	0	19			
		Kw-d1-4	0	8	0	0	0	0	0	0	8			
		Kw-d1-5	0	7	0	0	0	0	0	0	7			
		Kw-d1-6	0	10	1	0	0	0	0	0	10			
		Kw-d1-7	1	4	0	0	0	1	0	0	6			
		Kw-d1-8	0	5	0	0	0	0	0	0	5			
	横型	Kw-d2-1	0	16	1	0	0	0	0	0	17	53	227	
		Kw-d2-2	0	9	1	0	0	0	0	0	10			
		Kw-d2-3	0	5	0	0	0	0	0	0	6			
	縦長型	Kw-d2-4	0	16	2	0	0	0	0	0	18	815		
		Kw-d2-5	0	0	1	0	0	0	0	0	1			
		Kw-d3	0	2	0	0	0	0	0	0	2			
不定形石器	縦長片剥材	Kw-e1-1	1	156	23	3	0	8	4	1	195	2,333		
		Kw-e1-2	0	136	12	3	0	3	3	0	157			
		Kw-e1-3	0	33	2	1	0	1	0	0	37			
		Kw-e1-4	0	41	5	3	1	1	0	0	51			
		Kw-e1-5	1	89	7	3	0	6	1	0	98			
		Kw-e1-6	0	61	5	3	0	2	0	0	71			
		Kw-e1-7	0	59	0	0	0	1	1	0	56			
		Kw-e1-8-1	0	65	2	0	0	2	0	0	69			
		Kw-e1-8-2	0	7	0	0	0	1	0	0	8			
	横長片剥材	Kw-e1-9	0	78	7	1	1	4	1	1	73			
		Kw-e2-1	0	36	4	0	0	3	0	0	43	336		
		Kw-e2-2	0	63	11	0	0	5	1	0	80			
		Kw-e2-3	0	110	18	0	0	9	3	0	149			
	横長彫刻石器	Kw-e2-4	1	47	12	0	0	8	0	0	68	463		
		Kw-e2-5	0	3	1	0	0	0	1	0	5			
		Kw-e3-1	0	72	9	2	0	7	1	0	91			
		Kw-e3-2	0	75	13	1	1	6	1	0	97			
		Kw-e4	0	40	2	2	1	1	0	0	46			
打製石器	小形削片石材周縁調整	Kw-v5	0	9	2	2	0	6	1	0	14	463		
	二次加工のある剝片	Kw-v6	1	287	68	8	1	76	22	1	464			
	熱縫剥離のある剝片	Kw-v7	0	206	64	5	0	32	10	0	317			
	欠損分類不可	Kw-v8	0	136	9	2	0	6	0	0	153			
	平面加工	Kw-f1	0	1	0	0	0	0	0	0	1			
	両面加工	Kw-f2	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	打製石斧	Kw-g	0	0	2	0	1	0	0	1	4			
	橢形石器	Kw-h	0	4	0	0	0	0	0	0	4			
	圓形石器	Kw-i	1	6	1	0	0	1	0	0	9			
	刮削刀	Kw-l	0	6	1	0	0	5	2	1	15			
石核	石核	Kw-n	1	46	33	1	1	28	10	0	120	171	171	
	未製品類	Kw-n	0	139	20	3	1	7	1	0	171			
	合計		32	2,994	626	94	11	605	306	5	4,673			

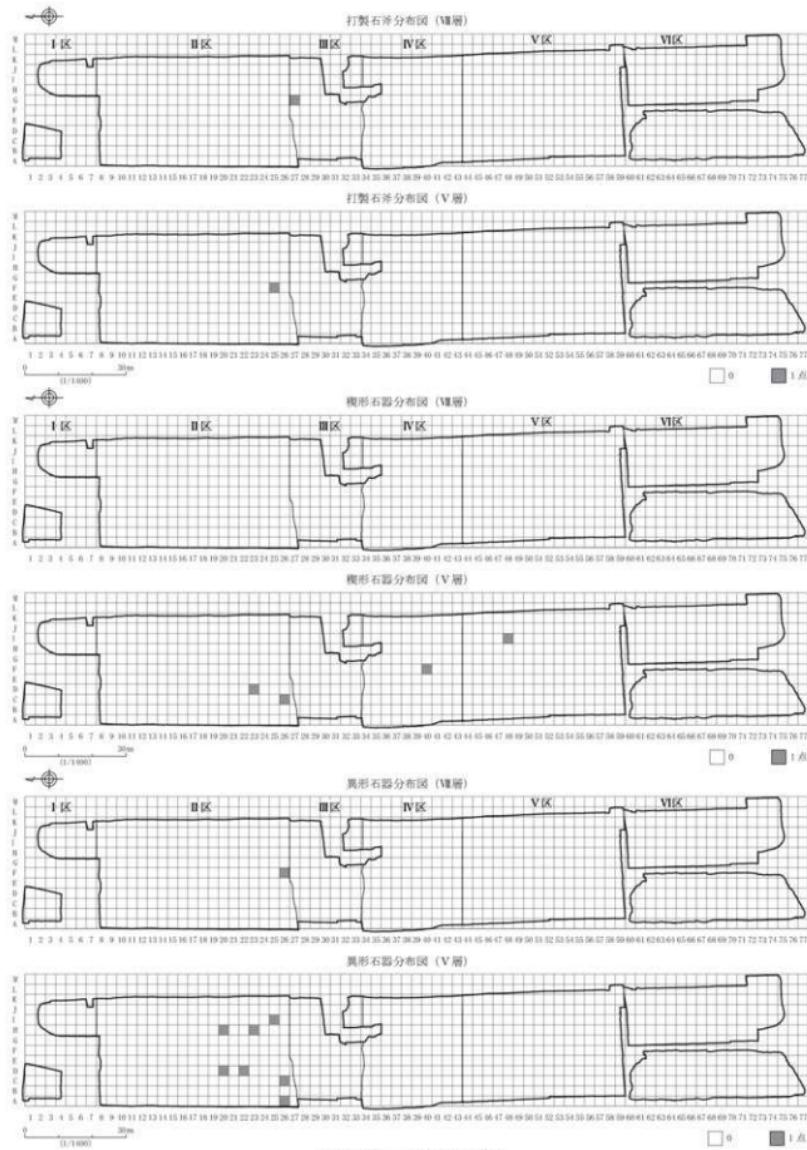
1. 繩文時代



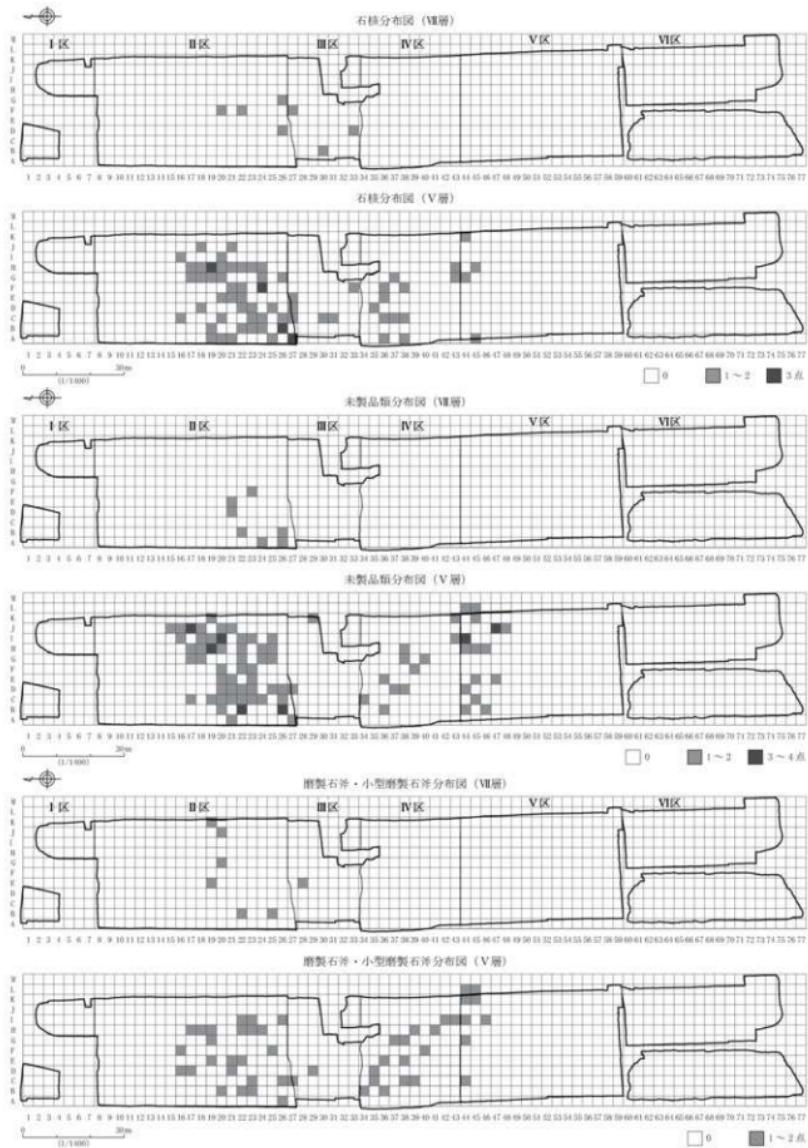
第394図 石器分布図(1)



1. 繩文時代



第 396 図 石器分布図 (3)



第397図 石器分布図(4)

2. 古墳時代以降

2. 古墳時代以降

1) 遺構の変遷

Ⅲ層上面からは、古墳時代から平安時代にかけての遺構と遺物を検出した。時期的には、断続的ながら古墳時代前期（塩釜式期）、奈良時代（8世紀後半頃）、平安時代（9世紀中～後葉）の3時期あり、それぞれ集落跡を検出した。9世紀代の集落が廃絶したのち、痕跡の可能性が想定される小溝状遺構群が調査区のほぼ全域に展開することから、集落の廃絶後は生産域として利用されたと考えられる。

主な遺構の変遷については第39図に示した。

2) 墨書き土器

墨書き土器は全部で15点出土しており、いずれも9世紀中～後葉の時期と考えられる。遺構からは、SI401・402・403・405・406、SK409から10点出土している。SI401からは墨書き土器2点、SI402からは墨書き土器2点と刀子2点、SI403からは墨書き土器3点と刀子2点、ほかは墨書き土器が1点ずつ出土している。

判読できる文字のうち、もっとも多いのは「罫」（「岡」の異体字）で、「罫口」と二文字で表記される例が多い。ほかに1点だけであるが「得」の文字が見える。

東北地方における「罫」の字の出土例として、これまでに墨書きや刻書き土器として23例が確認されている。その内訳は、宮城県6点、秋田県3点、福島県14点である〔青森県史編さん古代部会2008〕。宮城県では、多賀城市の市川橋遺跡で3点、高崎遺跡で1点、東山遺跡で1点、それぞれ「罫」と一文字だけ記された墨書き土器が出土しているほか、本遺跡に程近い仙台市太白区の富沢遺跡からは「罫マ」（「岡部」）と記された墨書き土器が1点出土している〔仙台市教育委員会1995〕。

墨書きされた文字の意味については不明であるが、遺構外から出土したものを含めてすべてIV区から出土しており、墨書き土器の分布には偏在性がみとめられる。

このほかに文字に関する資料として、SI503から須恵器製の硯1点、SD402から須恵器壺の内面底部を利用した転用硯1点が出土している。

3. 総括

大野田遺跡は、荒川によって形成された馬の背状に東西方向へ延びる標高9m前後の自然堤防上に位置している。遺構検出面は3面であり、Ⅲ・V・VII層の上面からそれぞれ遺構と遺物を検出した。Ⅲ層上面からは古墳時代から平安時代にかけての集落跡と生産跡が、V・VII層上面からは縄文時代後期前葉の祭祀跡などが見つかった。

縄文時代

・縄文時代の遺構は、VII層上面とV層上面から検出した。両層の間には間層（VI層）を挟むが、出土した遺物からは明瞭な時期差は確認できず、双方とも後期前葉（南境式期）の時期と考えられる。IV区のV層は、土層が細かく細分される部分があり、包含される遺物は細片が多く、炭化物や焼土、骨片、さらに小礫等が多く含まれていることから、自然堆積層ではなく、人為的に盛土・整地し、V層上面で再び同様の遺跡を構築したものと考えられる。

・調査区の地形は全体に平坦であるが、IV区が周囲よりわずかに高くなっている。両層の遺構はここを中心に分布が見られる。

・VII層上面からは、縄文時代後期前葉の遺構を検出した。遺構は、II区からIV区にかけて、配石37基、埋設土器37基、土坑196基、性格不明遺構1基を検出した。柱穴状を呈する小ピットが多数見つかっていることから掘立柱建物の存在が想定され、配石、土坑を中心として周囲に掘立柱建物跡を配置した遺構の配置関係が考えられる。

・V層上面からは、縄文時代後期前葉と一部晚期中葉（大洞C式期）の遺構を検出した。遺構は、IV区を中心に、堅穴遺構1軒、環状集石1基、配石11基、埋設土器5基、土坑32基、溝跡1条、河川跡3条、性格不明遺構1基を検出した。微高地であるIV区のほぼ中央に、直径12mほどの円碟をまばらに敷き詰めた環状集石1基と、配石

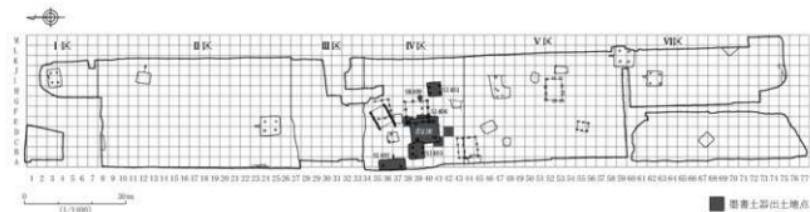
30m
0 30m (1/1000)



調査区全域に小溝状遺構群が展開する。

第398図 Ⅲ層の主な遺構変遷図

3. 総 括



第399図 墨書き土器分布図



第359図15

0 5cm
(1/2)

図面番号	登錄番号	種類別	層	縄	区	出土地点	墨書き部位	方向	款文	備考
第314図4	E-016	埴輪器	II-	III	IV	S1401	体部外側	正位	「墨口」	
第359図8	E-091	埴輪器	II-	III	IV	D42 IX	底部外側		「墨口」	
第332図5	E-089	埴輪器	II-	III	IV	S1409	底部外側		「墨口」	
第321図4	E-046	埴輪器	II-	III	IV	S1403	体部外側	正位	「墨口」	
第320図5	E-035	ロクロ土師器	II-	III	IV	S1403	底部外側		「墨口」	
第321図5	E-044	埴輪器	II-	III	IV	S1403	底部外側		「墨口」	
第359図9	E-092	埴輪器	II-	不明	IV	C41 IX	底部外側		「正口」	
第314図6	E-017	埴輪器	II-	III	IV	S1401	体部外側	横位	「墨口」	
第317図2	D-056	ロクロ土師器	II-	III	IV	S1402	底部外側		「器」	
第359図13	E-104	埴輪器	II-	不明	IV	不明	底部外側		「口」	
第318図3	E-033	埴輪器	II-	III	IV	S1402	底部外側		「口」	
第327図8	E-067	埴輪器	II-	III	IV	S1406	底部外側		「口」	
第325図13	E-090	埴輪器	II-	III	IV	S1405	底部外側		「口」	
第360図2	E-097	埴輪器	II-	III	IV	D39 IX	底部外側		「口」	
第359図15	E-098	埴輪器	II-	III	IV	E38 IX	体部外側		墨模	

第400図 墨書き文字集成図

11基があり、その周間に埋設土器や土坑、堅穴遺構などが取り囲むように位置している。II区のSK210から焼けた骨片と骨角器が出土した。骨片には獸骨や鳥骨、魚骨があり、骨角器には離頭話・ヤス・釣針などがある。焼けたために残存していたものと考えられる。ほかに河川跡が4条見つかっている。SR201はI区からII区中央にかけて、川幅の狭いSR301はIII区南側からIV区北側にかけて、SR501・502はV区からVI区にかけて確認されている。SR501・502の堆積土はシルトを主体とし、植物遺体が含まれる土層が確認されることから比較的穏やかな流れであったと推測されるが、河床は深くIX層以下に及んでいる。いずれも後期前葉の遺構より新しい。また、上述した遺構のうちSR501上面で検出したSK614は晩期中葉の土坑である。後期前葉の遺構群から少し離れた調査区南端のVI区から大洞C₂式期の浅鉢を伴って1基だけ見つかったもので、ほかに該期の遺構や遺物は確認されていない。

- ・V層は遺物包含層で、後期前葉の遺物を多量に包含する。
- ・縄文時代後期前葉の大野田遺跡は居住域からははずれた祭祀に関わる地域であったことが考えられる。
- ・また、遺構は検出してないが、ほかに中期中～末葉（大木8b～10式期）にかけての遺物が僅かに出土している。

古墳時代以降

- ・III層上面からは、古墳時代前期と奈良・平安時代の遺構を検出した。
- ・調査区の地形は全体に平坦であるが、IV区からV区にかけてわずかに高い。堅穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑など集落にかかる遺構は、微高地であるIV・V区を中心に分布が見られる。
- ・遺構は、堅穴住居跡10軒、堅穴遺構14基、掘立柱建物跡6棟、土坑74基、溝跡26条、小溝状遺構群27群、性格不明遺構3基を検出した。
- ・古墳時代前期の遺構として、SI501・602・604、SB403(SD403-404)を検出した。SI501・604からは塩釜式期の遺物が出土しており、このうちSI501から赤彩は確認できないが体部上半に櫛描文による加飾が施された土師器蓋などが出土している。SI602、SB403は遺物の出土はないが、遺構の軸方位がSI501・604と近似していることから同時期の遺構と判断した。SB403は梁間1間×桁行3間の建物である。平側は、溝状に掘り廻めた掘り方(SD403-404)の中に長方形の柱掘り方を穿って柱を据えるもので、柱掘り方の中にはそれぞれ2本の柱痕跡が見つかっている。建て替え、あるいは、通し柱と床を支える添柱(柱)である可能性が考えられる。また、遺構は検出してないが、終末期頃に比定される遺物がSD401の堆積土中から1点出土している。
- ・奈良時代の遺構として、SI101・201・504・505・507・601を検出した。このうち、SI101・201・504・601からは8世紀後半頃の遺物が出土している。SI505・507からは出土遺物はないが、SI101・201・601と同様、カマドが北辺に付設されていることからこの時期の遺構と判断した。なお、SI201からは鐵鏃が4点出土している。
- ・平安時代の遺構として、SI204・401・402・403・404・405・406・503を検出した。いずれも出土した遺物から9世紀中～後葉の時期と考えられる。SI204からは出土遺物はないが、SI401・402・403・405と同様、カマドが東辺に付設されていることからこの時期の遺構と判断した。SI503は「L」字状の平面形を呈するもので、須恵器製の硯と思われるものや刀子、鐵鏃などが出土している。
- ・また、SI202・203・408・409・502・506・603の7基は、遺構の大半が調査区外にあるものや出土遺物がないもので帰属時期は不明である。このうち、SI506は長方形の平面形を呈するもので壁際に柱を配している。カマドなどの付帯施設は検出していない。
- ・掘立柱建物跡は、IV・V区から5棟検出した。このうちSB401・501・503の3棟は、梁間2間×桁行3間の東西棟建物で、SB401には南廊が、SB503には北廊が付く。SB502は梁間1間×桁行2間の南北棟建物である。SB402は北側の柱筋が不明であるが、梁間2間以上×桁行3間の建物と思われる。柱掘り方の平面形は、SB401・402は円形と方形、SB502・503は方形、SB501は規模の大きい長方形である。
- ・溝跡のうち2条一組で並走するものがある。I区で検出したほぼ正確に東西方向へ延びているSD102・103と、II区で検出したほぼ南北方向へ延びるSD201・202で、道路の側溝である可能性が考えられる。規模は上幅0.70～0.82m、深さ0.43m前後で、軸方位7.00m前後である。
- ・畝跡の可能性が想定される小溝状遺構群は、調査区のほぼ全域から27群検出した。時期を特定できるような遺物の出土がなく帰属時期は不明であるが、前述した9世紀代の遺構と重複し、それより新しいことから、9世紀代より新しい時期の遺構と考えられる。

3. 総 括

- ・平安時代の出土遺物のうち、墨書き器が 15点見つかっている。いずれもIV区から出土したものである。判読できる文字のうち、もっとも多いのは「罫」（「岡」の異体字）で、「罫口」と二文字で表記される例が多い。ほかに 1 点だけであるが「得」の文字がある。このほかに文字に関連する資料として、SI503から須恵器製の硯 1点、SD402から須恵器坏の転用硯 1点が出土している。
- ・また、遺構は検出していないが、IV区から弥生時代の石包丁が 1点、III区から中世以降のものと思われる茶白(上白)が 1 点出土している。

引用・参考文献

- 安達尊伸・中村 直 2007 「門前式土器の周辺－地域性認識の試論－」『岩手県における縄文文化の諸相』 岩手考古学会
- 秋田かな子 2008 「加曾利B式土器」『絶対 縄文土器』（株）アム・プロモーション
- 秋田県教育委員会 2011 『漆下遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第464集
- 青森県史編さん古代部会編 2008 『青森県史 資料編 古代2 出土文字資料』 青森県
- 福村晃嗣 2008 「門前式土器」『絶対 縄文土器』（株）アム・プロモーション
- 岩手県文化振興事業団 1993 『新山桜現社跡遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第188集
- 岩手県文化振興事業団 2012 『川目A遺跡第5次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第589集
- 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について」『埼玉考古 27号』 埼玉考古学会
- 榎本剛治 2008 「十腰内I式土器」『絶対 縄文土器』（株）アム・プロモーション
- 鹿角市教育委員会 2005 『大湯環状列石（Ⅰ）』 鹿角市文化財調査資料77集
- 鹿角市教育委員会 2010 『大湯環状列石（Ⅱ）』 鹿角市文化財調査資料98集
- 大迫町教育委員会 1979 『立石遺跡発掘調査報告書』 大迫町埋蔵文化財報告書第3集
- 加納 実 2008 「堀之内式土器」『絶対 縄文土器』（株）アム・プロモーション
- 菅野美香子 2012 「秋田県漆下遺跡出土縄文時代後期土器の変遷について」『研究紀要 27号』 秋田県埋蔵文化財センター
- 北秋田市教育委員会 2011 『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書』 北秋田市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 縄文セミナーの会編 1990 『縄文後期の諸問題』 第4回縄文セミナー
- 縄文セミナーの会編 1996 『後期中葉の諸様相』 第9回縄文セミナー
- 縄文セミナーの会編 2002 『後期前半の再検討』 第15回縄文セミナー
- 縄文セミナーの会編 2012 『縄文後期土器研究の現状と課題』 第25回縄文セミナー
- 鈴木克彦 2008 「宝ヶ峯・手稻式土器」『絶対 縄文土器』（株）アム・プロモーション
- 鈴木徳雄 2000 「縄紋後期浅鉢形土器の意義—器種と土器行為の変化—」『縄文時代 11』 縄文時代文化研究会
- 仙台市教育委員会 1981 『山口遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第33集
- 仙台市教育委員会 1987 『六反田遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第102集
- 仙台市教育委員会 1995 『伊古田遺跡—仙台市高速鉄道開通遺跡発掘調査報告書III—』 仙台市文化財調査報告書第193集
- 仙台市教育委員会 1995 『富沢・泉崎浦・山口遺跡（8）』 仙台市文化財調査報告書第203集
- 仙台市教育委員会 1995 『六反田遺跡—仙台市高速鉄道開通遺跡発掘調査報告書IV—』 仙台市文化財調査報告書第199集
- 仙台市教育委員会 1996 『下の内浦・山口遺跡—仙台市高速鉄道開通遺跡発掘調査報告書V—』 仙台市文化財調査報告書第207集
- 仙台市教育委員会 2000 『王ノ壇遺跡—都市計画道路「川内・柳生線」開通遺跡 発掘調査報告書I—』 仙台市文化財調査報告書第249集
- 仙台市教育委員会 2004 『元袋遺跡—都市計画道路「川内・柳生線」開通遺跡 発掘調査報告書II—』 仙台市文化財調査報告書第272集
- 仙台市教育委員会 2011 『下ノ内遺跡・春日古墳・大野田官衙遺跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第390集
- 仙台市史編さん委員会編 1995 『仙台市史 特別編2 考古資料』 仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 1999 『仙台市史 通史編1 原始』 仙台市
- 高橋次主 1987 「安達郡岩代町永畠遺跡出土の特殊片口鉢」『福島考古 第28号』
- 高橋忠彦 1989 「秋田県の縄文時代後期の土器」『研究紀要 4号』 秋田県埋蔵文化財センター
- 福島県教育委員会 1985 『荒小路遺跡—母畑地区遺跡発掘調査報告書19—』 福島県文化財調査報告書第148集
- 福島県教育委員会 1988 『平中遺跡』『国営猪戸川農業水利事業遺跡調査報告』 福島県文化財調査報告書第208集
- 本間 宏 2008 「南境・綱取式土器」『絶対 縄文土器』（株）アム・プロモーション
- 宮城県教育委員会 1984 『二星敷遺跡—東北自動車道遺跡調査報告IX—』 宮城県文化財報告書第99集
- 三戸部秀樹 2004 「山形県の後期前半の土器について」『研究紀要 2号』 山形県埋蔵文化財センター
- 山形県教育委員会 1990 『川口遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第151集
- 山形県教育委員会 1997 『津谷遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第46集
- 山形県教育委員会 2003 『かっぽ遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第114集
- 陸前高田市教育委員会 1992 『門前貝塚発掘調査報告書』 陸前高田市文化財調査報告書第16集

